

世界中の男がTS異種  
族幼女化して女がふた  
なり化した世界 ~大  
好きなお兄ちゃんが角  
折マゾ奴隷にさせられ  
ていたなんて~

中の人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

タイトルの通りです。お兄ちゃんは鬼幼女です。ふたなりの妹に角を折られます。ついでにレイプもされます。姉妹は四姉妹です。各編ごとにパラレルです。家族以外にも犯されます。そんな感じですよ。ノクターンにも投稿してます。

# 目次

1	長女編（次女視点）	1
2	長女編（角握り）	12
3	長女編（角折、本番）	25
4	長女編（強制おねだり、窒息、イラマ）	35
5	いじめ編（拘束）	51
6	いじめ編（本番、絶頂報告）	62
7	いじめ編（無自覚オナホ宣言、チン嗅ぎ）	75
8	いじめ編（全裸土下座、精飲）	87

9	いじめ編（ラブラブえっち）	100
---	---------------	-----



## 1 長女編（次女視点）

私のお兄ちゃんは凄い人だ。

いつも優しくて頼りになる人で、交通事故でお父さんとお母さんが死んじやってからはずっとお兄ちゃんが私たち四姉妹を守ってくれた。

まだ小さかったころの私たちは、お兄ちゃんがどんなに苦勞して私たちを育ててくれたのかなんてわかってなかった。でも今ならわかる。お父さんたちが遺してくれた財産を使えば、お兄ちゃんはもっと自由に、やりたいことを出来てたはずなのに。それなのにお兄ちゃんは、必要最低限以外ではそれを使わないで、いつか私たちが苦勞するところがないように、お金はどれだけあっても困らないなんて言って、当時通ってた大学をやめて働き始めた。

仕事で疲れているはずなのに、お休みの日にはいつだつて私たちに構ってくれた。私たちが困つてたら相談に乗って、寄り添ってくれた。お兄ちゃんがいたから私たちは寂しくなかった。みんなとそんな話を直接したわけじゃないけど、きつとみんなそう思ってる。

あの事故から8年経って、私たちももう高校生になった。

他のみんながどう考えてるかはわからないけど、私は高校を卒業したら就職するつもりだ。

私は初姉（ういねえ）みたいに頭が良いわけじゃない。希（のぞみ）みたいな魅力もない。幸（ゆき）みたいに運動が出来るわけでもない。ないない尽くしの平凡人間だ。

だから誰にでも出来ることで、少しづつでもお兄ちゃんに恩返しするんだ。

それで、いつかはお兄ちゃんに並び立つても恥ずかしくない人になりたい。

血の繋がった実の兄にこんな気持ちを持つのはおかしいことなのかもしれない。社会には認められないかもしれない。みんなには理解されないかもしれない。

それでも良い。私は、城詰和（しろつめのどか）はお兄ちゃんが好きだ。お兄ちゃんのことを一人の男性として愛してる。この想いをいつかお兄ちゃんに伝えて、ずっと一緒に居たいって思ってる。

そう、思ってたのに……

「のどかおねえちゃん！ おかえりー！」

学校から帰宅した私を能天気で可愛らしい声が出迎えた。

とてとて可愛らしく足を動かして玄関までやってきた緑髪の幼女は、勢いよく私に抱き着いて嬉しそうに頬ずりをする。

「えへへ」

「……お兄ちゃん？」

数日前、お兄ちゃんは未曾有の大災害で鬼の幼女になってしまった。

でもそれはあくまで身体だけの話で、お兄ちゃんの心は何も変わってないはずだった。

それなのに、こうして私に抱き着いてるお兄ちゃんは幼女そのもので……。

「ごめんなさい、和。私のせいです……」

「初姉」

お兄ちゃんに続くように私を出迎えた黒髪を背中まで伸ばした物腰の柔らかな女の子、私たちの長女である初姉がとても申し訳なさそうな表情で立っていた。

今からおよそ一か月前、世界中どんな小さな国、辺境の地域にも一切の例外なく降いかかった未曾有の大災害。人によつてはそれを怪奇現象や世界改変とも言うらしい。正式な名称は未だ定められてないらしいけど、日本では便宜上『男性異種幼女化及び女性超人化現象』なんて長つたらしい呼び名が使われてる。なんて言つても、それは公的な場面だけの話でネットとかではTS病やふたなり病なんて名前が広がってる。私

だって、そう呼んでるし。

内容は呼んで字のごとくで、ある日世界中の男の人が幼い女の子、それもただの人間じゃなくて獣の特徴を持った獣人だったり、伝承に伝わる吸血鬼や鬼なんかに変化した。その種族の数はとても多くて、今でも全ての種族のことは把握出来てないらしい。それに何の種族かわかっててもその種族の細かいことはまだまだわからなかったり、色々手探りな状態なんだとか。お兄ちゃんが変化した鬼のことも詳しいことは全然わからない。

だけど大変なのはそれだけじゃなかった。変化したのは男の人だけじゃなくて、女の人もだった。女の人は力が今までよりもずっと強くなって、身体も頑丈に、感覚も鋭くなった。でもそれは元々あったものが強化されただけ。一番の変化はやっぱアレ、男の人の象徴が生えて来たことだと思う。希いわく、ふたなりって言うらしい。

あの日の朝は本当に大変だった。目が覚めたら全然知らない感覚がお又にあったんだもん。おつきな悲鳴をあげてお兄ちゃんに泣きつこうと思ったら、お兄ちゃんは角の生えた緑髪の美幼女になって、それだけでももう限界だったのに初姉たちも私と同じようにアレが生えてた。

私にはもう何が何だかわからなくて、怖くて、泣いてしまっそうだった。だけどそんな私をお兄ちゃんは抱きしめて、優しく頭を撫でてくれた。あんな姿になってもお兄



ちゃんはお兄ちゃんなんだってわかって少しだけ安心した。

その後も世界中が同じ状況で色々と混乱はあったけど、だからって人が動かないと社会は回らなくて、なんだかんだで私たちは変化に適應してなあなあに日常へ戻って行った。

ただそうは言っても、何もかも元通りとはいかない。中でも私たちの日常で一番の變化は、お兄ちゃんに仕事を辞めて貰ったことだ。

大災害で男性は幼女に、女性はふたなりになっちゃったせいで、男女の性の役割は完全に逆転した。なんでかはわからないけど女性が女性を好きになることは大災害前と同じくらい珍しいことで、基本的にはTSした男性、つまり異種族幼女を好きになる。TS娘同士では子供を作れることは出来ないけど、ふたなり同士なら子供を作れる。だから、女性の同性愛には種族的な障害はないはずなのに不思議だよな。

それだけなら別に大した問題ではないんだけど、ふたなりになった女性の性欲は大災害前の男性をも大きく上回るって言われてる。元々男の人がどれくらい性欲強いのかなんて知らないけど、大災害前と比べて自分の性欲が強くなったのは確かだった。

加えて、TS幼女にも性欲はあるらしいけど、ある条件を満たさない限りはふたなりや男性だったころよりも随分と弱いらしい。

女性は支配する側に、男性は支配される側になった。

ただでさえ、性犯罪は女性に比べて男性のものが多かった。それなのに性欲の差が更に広がったらどうなってしまうのかなんて、火を見るよりも明らかだ。しかも女性はふたなり化しただけじゃなくて、力も強くなってる。異種族に変化したTS娘だけど、超人化した女性とは外見年齢と同じ通りの腕力差がある。TS娘にまともな抵抗なんて出来ない。今でこそ多少は落ち着いてるけど、大災害直後はふたなりによるTS娘への性犯罪は全貌を把握できないほど横行してたらしい。

当時の私たちは当然そんなことは知らなかったけど、自分たちの性欲が異常に高まつたこと、その性欲の対象がお兄ちゃんへ向かってたことを理解してた。私たちはお兄ちゃんのことを大好きで、大切に思ってるからこそ我慢できたけど、もしもお兄ちゃんをいつもどおり仕事へ行かせたらどこの誰とも知れないふたなりに襲われるかもしれない。ううん、間違いなく襲われてた。

だからお兄ちゃんを仕事には行かせなかった。っていうか、辞めさせた。世界の混乱に便乗して、初姉が職場に連絡をしてそれ以来一度も仕事には行かせてない。それが非常識で、迷惑をかける行為だなんてみんなわかってたけど、それでも私たちにとってはお兄ちゃんを守るの方が大切だった。

お兄ちゃんは自分の身が危ないなんてこと全然理解してなくて、仕事を勝手に辞めさせられて家に軟禁されることを最初こそ不満そうにしてたけど、お兄ちゃんが勝手に

出歩かないように私たちが一日交代でお兄ちゃんと一緒に居ると、久しぶりに私たちと長く一緒に居られるのが嬉しかったみたいで機嫌は日に日に良くなつてた。希と幸は中学くらいにはお兄ちゃん離れしてたから寂しかったのかもしれない。

世界の混乱が収まるにつれて治安も戻っていった。一人での外出は今でも許してないけど、私たちの誰かと一緒なら普通に外出できるくらいには世の中も落ち着いた。あと少しも経てば、姉妹の中の一人が学校を休んでつきつきりになる必要はなくなるはずだった。

「~~~~♪」

床に自由帳と長く美しいパステルカラーの緑髪を広げて、うつ伏せに寝そべりながら鼻歌を歌って絵を描くお兄ちゃんを見て、咄嗟に出そうになった溜息を何とか呑み込んだ。

お兄ちゃんが幼女になった時も私はショックを受けた。あの優しくて頼りになるお兄ちゃんが別人になつちやつたみたいで。でも、言葉や行動の節々にお兄ちゃんの面影があつて、心は変わってないんだって、お兄ちゃんはここに居るんだって思えた。

でも、今のお兄ちゃんは完全に別人だ。それで嫌いになるほど薄情なつもりはないけど、私が好きだったお兄ちゃんはここにはいない。それがどうしようもなく辛くて……。

「本当にごめんなさい……」

「ううん、初姉は悪くないと思う」

今日の朝に見たお兄ちゃんと今のお兄ちゃんの外見で、一つ大きく変わってる部分がある。それは角の有無。天を突くように伸びてた15cmくらいの二本の硬質な角が、根本の少し上あたりまでなくなつて断面が平らに、かどは丸みをおびてる。

今日は初姉がお兄ちゃんと一緒に留守番をする日で、そのお留守番中にお兄ちゃんは工具箱から小ぶりの金のごぎりを持ち出して初姉に頼んだらしい。自分じややり辛いから代わりに折ってくれないかって。

前々からお兄ちゃんは、おでこの生え際辺りから伸びる一对の角を鬱陶しそうにしてた。先端は結構鋭利で危なかったし、寝るときに寝具に引っかからないようにとか、私たちにはわからない苦労があつたみたいだった。

だから初姉も驚きはしたけど、納得もした。お兄ちゃんが悩んでるのは知ってたから、覚悟を決めたんだって。

お兄ちゃんは自分の角は爪とか髪みたいなもので感覚がないと言つたらしい。だから心配しなくて良いって。初姉はそれを聞いて一応インターネットで調べてみたけど、鬼の角に関する具体的な情報は出てこなかったそうだ。実際私が今スマホで調べて見ても、創作やフィクションがヒットするだけで現実のそれは何もわからない。

初姉は万全を期して先端の方から削って見て、お兄ちゃんが何の痛みも感じてなさそうなことを確認してから根本付近を切断することにした。金のこぎりでガリガリと削ってる最中も、お兄ちゃんは何でもなさそうにじっとしてたらしい。

そうして一本目を削り終え、もう一本も削り終わつた時、異変は起きた。それまでずっと静かに大人しく角を削られてたお兄ちゃんが、幼子のように初姉に甘えだしたのだとか。たぶん、私が帰ってきたときみたいな感じかな。

こうしてお兄ちゃんの希望によつてお兄ちゃんの角は削り切られ、多分その結果としてお兄ちゃんの心は幼くなった。

「お兄ちゃんが、頼んだだもんね」

頭の良い初姉にしては思慮の足りない行動だとは思うけど、その場で頼まれたのが私だったら断れてたかわからない。私は少しでもお兄ちゃんの力になって恩返しをしたいつて思ってるから、私にしかできないとか言われたら流されちゃうかもしれない。きつと初姉もそうだったんだと思う。

……はあ

「のどかおねえちゃん！ アメあげる！」

「え？」

「はい！」

いつの間にか私に近づいてきてたお兄ちゃんが、天使のように愛らしい笑顔を浮かべて握りしめた飴玉を私に押し付けた。

「げんきだして！ おいしいよー」

「……うん、ありがとう」

少しだけ、驚いた。

お兄ちゃんに心配をかけないように、初姉を傷つけないように、出来るだけ今の気持ちを態度に出さないように気を付けてた。それでも初姉には多分落ち込んでいることはバレてると思うけど、まさか今の状態のお兄ちゃんに気づかれるとは思わなかった。

そっか。姿が変わっても、少し幼く、アホっぽくなっても、お兄ちゃんはお兄ちゃんのままなんだ。私たちのことを大切に思ってくれてる、お兄ちゃんなんだ。

「初姉。お兄ちゃんのこと、私たちで守らなきゃね」

「……はい。そうですね」

責任を感じてるのか、少しだけ間を置いて初姉はそう答えた。

初姉は私たち姉妹の中で一番賢くて頼りになる人だ。いつも率先してお兄ちゃんを助けて、昔は忙しいお兄ちゃんの代わりに家事全般を担当してたこともある。今は姉妹でそれぞれ分担してるけどね。わがままだって言わないし、お兄ちゃんを除けば家族の中で一番しっかりしてるのは初姉で間違いない。

お兄ちゃんは私たちに迷惑をかけたくないなんて言うかもしれないけど、私は迷惑だなんて思わない。それに、初姉たちに負担をかけるのも私が高校を卒業するまでの間だけだ。私が独り立ち出来たら、お兄ちゃんのこととは私が幸せにする。

待っててね、お兄ちゃん。

## 2 長女編（角握り）

兄を自らに屈服させ、蹂躪し、辱しめたいと思うようになったのは、あの悲惨な事故から3年ほどが経過し悲しみも癒えてきた頃、初がまだ12歳の時からだった。

その性癖の源流は、初が幼少期に見た変身ヒロインのアニメにある。強く凛々しく高いヒロインたち。そんなヒロインたちが強大な敵になすべくなく敗れ、絶望に染まりゆく。そんな展開があった。女兒向けのアニメであるため、当然その後には絶望を振り払いパワーアップしたヒロインたちは逆転勝利するわけだが、幼き日の初はヒロインたちがボロボロになって地に伏せる姿が目には焼き付いて離れなかった。

どれだけ傷つき汚れても輝きが色あせることのない、夜空に浮かぶ星々の煌めきのように美しく、尊いもの。だからこそ、それが地に堕ち、色あせるはずのない輝きが失われることに強い興奮を覚えた。

とはいえ、あくまでも幼少期の刷り込みであり初自身はその自らの原点を覚えてはいない。ただなんとなく、いつも自分たちを守ってくれる頼りがいのある兄を汚してみた、その尊厳を踏みにじってみたいと、そう思ったのだ。

もちろん、実際には何か行動を起こすつもりなんてなかった。兄に対してそうした性



的興奮を抱いていることは事実だったが、そんなものはフィクションでも妄想でも発散できるもの。それ以上に初は兄のことを尊敬していたし、感謝していた。四姉妹のなかでも特に理性的な初が、一時の欲求に負けて取り返しのつかないことなどするはずがなかった。

だが、初の自分本位な欲望を抑えつけていた理性と言う名の鎖は、ある日を境に唐突に弱体化することになる。

大災害。

世界中の男性が異種族の少女に変化し、世界中の女性が超人に変化した日。

あの日から初は、ふとした時には愛らしい少女の姿となった兄を目で追い、一挙手一投足から目が離せなくなり、気が付けば自らの男性器をギンギンに勃起させるようになっていた。

兄が少女になってしまったこともいけなかった。元々初の性癖は女兒向けアニメの変身ヒロインによって植え付けられたものであり、自らを慰めるときもそうした系統のおかずを使うことが多かった。

成人男性であったころの兄と、可愛らしい少女となった兄。そのどちらがより初の性癖に突き刺さるかなど言うまでもなかった。しかも、そもそもその生物的本能として、ふたなりはTS娘に発情するようになっていたのだ。

もしも兄が心まで無邪気な幼女になつてくれているならば、初をここまで苦しませはしなかつただろう。初はあくまでも気高い精神を持った強い少女が好きなのであり、普通の女兒が相手であれば劣情を抱くことなどない。

初のストレスは日に日に溜まつていた。表面上は何も変わつていないように取り繕い、姉妹たちにもバレていなかったが、またぐらに生えた20cmを優に超える息子をしごく頻度はドンドン増えていった。

だがそれももう限界だ。少し兄離れし始めていた妹たちが積極的に自分に関わつてくれるのが嬉しいのか、あるいは女兒の身体になつたことで遠慮がなくなつたのか、兄のスキンシップは日に日に子供のようになり距離感の近いものになつていった。

初の膝の上に座つて安心しきつたようにもたれ掛かつてきた時には、咄嗟に兄を降ろしてトイレに駆け込むことになつた。

幼女化した兄の頭髮は薄つすらと蜂蜜のように甘い香りがして、その匂いとおしりの感触だけで3発は余裕だった。あまりにも長いトイレに初のことを心配したのか、兄がトイレをノックして大丈夫かと問いかけて来た時など、即座にトイレの中に引きずり込んで犯してしまいそうになるほどだった。

自らの性癖とふたなりの性欲によつて苦しめられ続けた初がそれでも理性を失わなかつたのは、兄への感謝や尊敬、そして妹への罪悪感があつたからだ。次女の和が兄の

ことを異性として愛していることを姉妹たちは知っており、そしてその行く末を応援していた。だからこそギリギリのところまで耐えることが出来ていたのだが、ある日初の元へとある友人から連絡があつたことで理性と欲望のバランスは崩れることとなつた。

その友人には鬼幼女となつてしまつた弟がおり、二人はお互いに鬼の情報を交換しあつてた。異種族はその種類が多すぎる関係上、ネット上にも正確な情報がほとんど載っていない。そのため、自ら検証して情報を積み上げていたり、同種の幼女が身近にいて、かつ信頼のおける者と情報共有することで種の理解を深めていく必要がある。

今回初が友人から提供された情報は、鬼の角についてだつた。そしてそれを知つた時、初の理性の鎖は弾け飛んだ。

「初？ 今日もお菓子作りするのか？」

「いえ、今日はもつと楽しいことをします」

平日の早朝、高校へ向かう和たちを見送つた後、四姉妹の兄は自分と一緒に家に残っている初にそう問いかけた。

四姉妹は一日交替で兄が勝手に外出したり危ないことをしないように学校を休んで

見張っているわけだが、その見張り中に何をするのかはそれぞれで異なる。

例えば次女の和は兄を膝の上に乗せて一緒に小説を読んだり、自分の勉強を兄に見て貰ったりすることが多い。三女の希は一緒にゲームしたり片方がプレイしているのをもう一方が眺めている。四女の幸は公園に出かけて運動し、お昼ごろに帰ってご飯を食べたら一緒に昼寝をしたりする。

そんな中で普段初が何をしているかと言えば、兄が言った通りお菓子作りが一番多い。元々初は料理好きで、いつかはお菓子作りにも挑戦したいと思っていた。そんな中で、一日交替とはいえ学校を休んで丸一日使える時間が増えたことと、それから無自覚に自分を誘惑してくる兄の色気から気を紛らわせるため、これを気にお菓子作りに挑戦しているのだ。

これが意外と兄や妹たちにも好評で、今日もお菓子作りをするのか問いかける兄の声音は若干嬉しそうに弾んでいた。どうやら肉体が幼女になったことで、味覚も子供のそれに近づいているらしかった。

「もつと楽しいこと？　なんだそれ？」

「秘密です。でも、とっても良いことです。私の部屋に行きますよ」

「ふーん、りよーかい」

初から今日はお菓子作りではないと聞いてちよつとだけ残念そうな表情を浮かべた

兄だったが、続く初の言葉にすぐに笑顔に戻り、自室へ歩き出した初の後を何も疑わず大人しく付いて行く。

別に本当の子供みたいに、もつと良いことがあると言われて単純に機嫌が良くなったわけではない。見た目こそ幼女そのものだが、その精神性は間違はなく成人を超えた男性のもの。自分の為に学校まで休んでくれている妹たちに変な気を遣わせないように、なるべく笑顔で、何も気にしてないように、大切な妹たちに無駄な心配をかけないように振舞っているのだ。

そして同時に、愛する妹たちが自分に対してヒドイことをするなんてほんの少しも考えていない。

もしも超人化する前の初ならば、性欲に支配される前の初ならば、そんな兄の優しさ、信頼に気が付いて踏み止まれたかもしれない。これから自分がしようとしていることの罪深さに気が付いて、正道に戻れたかもしれない。

だが、全ては遅すぎた。

「あれ、なに——ひあつ♥」

初の部屋に入った兄が机の上に置かれた見慣れない工具に気が付き手に取ろうとする直前、部屋の扉を閉めた初が兄の片角を握りしめた。すると兄は、元は男だったとは信じられないほど甘い声をあげ、腰が抜けてしまったのかぺたりとその場に座り込んで

しまう。

「あつ♥ ういい♥ は、はなしてえ♥」

震えるその声に初を責めるような感情は籠っていない。

兄はまだ何が起きたのか理解できていなかった。

どうして初が自分の角を掴むのか。

その行為にどのような意味があるのか。

ただ、角を掴まれることが自分にどのような影響を及ぼすのかについては知っていたため、とにかく角をはなしてくれと懇願した。

そうすれば心優しい妹は、すぐに角をはなしてくれるはずだった。

「ふふつ、やつぱり知ってたんですね兄さん。鬼の角が性感帯、それも特別敏感だって」  
「やつ♥ なん、でえ♥ はなしてって♥ 言ってるのにい♥」

はなせと言われてはなすのならば、初は最初からこんなことはしない。

すぐに角から手をはなして、ごめんなさいと謝ると思っていた妹は、兄の懇願を受けてむしろ楽しそうに角を握る手に力を込めた。

超人化したことで強化された初の握力は、成人男性は勿論のこと、怪力を誇る鬼すらも凌駕する。

にぎにぎと角の感触を楽しむ様に強弱を加える初に、兄はされるがまま間抜けで劣情

を煽る喘ぎ声をあげることにしか出来ない。

「兄さん、角を触られるのすつごく嫌そうでしたもんね。自分で触ってるからこうなるって知ってたんですよね？ エッチな兄さん……」

「ち、ちが♥ ひあああつ♥」

責めるように耳元で囁かれた初の言葉に、兄は恥ずかしさから咄嗟に否定しようとするが、嘘は許さないとばかりに一際強く角を握りしめられ身体を小さく震わせる。

軽いものとはいえ、角を握られるだけで絶頂したのだ。

「みんな兄さんのために頑張ってたのに、兄さんは一人で自分の身体で楽しんでたんですね。最低ですな……♥」

「ち、違うう……♥ そんなことしてない♥」

目に涙を浮かべながら兄はいやいやと首を振る。

実際のところ、兄に自分を慰めるような時間がなかったであろうことを初は知っている。兄を守るためという名目で四姉妹のうちの誰かが常に一緒にいるのだ。お風呂ですらそうなのだから、兄が誰にも気づかれずにオナニーをする機会などなかっただろう。

さらにいえば、TS娘はふたなりと違い、ある特定の条件を満たさなければ性欲がほとんどわからないことが判明している。だから兄が四姉妹の目を盗んでオナニーをして

いた可能性は非常に低い。

自分の角が性感帯だということを知っているのは、偶然どこかにぶつけたか、興味範囲で触ったかした時に知ったのだろう。だから妹たちにも触られることを嫌がった。

もちろん初もそのことは知っていたが、あえて気づかないフリをして兄を責めた。

だってその方が興奮するから。何も悪いことをしてないのに責められて、快樂のせいでろくに言い訳もできずに愚図ってる兄が可愛いから。

獣の角を思わせる質感のそれをかりかりと優しく爪でかき、初は再び兄の耳元で囁いた。

「大丈夫ですよ兄さん。正直に言えたら許してあげますから」

「ん……♡ や♡ やってない……♡」

「ほら、素直になって兄さん」

「んっー♡ んっー♡」

口を開こうとすると喘ぎ声が漏れてしまうことが恥ずかしくなったようで、兄は口を閉じたまま目をぎゅつと瞑り首を横に振る。

ありもしないその事実をを認めることがとても恥ずかしいと思うと同時に、それを認めてしまうと何か大変なことが起きるような気がして、兄は必死で耐えた。

「ごめんなさいって、それだけで許してあげますよ？」



「んー♥」

角から全身に駆け巡る快楽を必死に耐え、慣れない快感に震える兄の姿は非常に愛らしく、初の興奮を煽る。

いい加減我慢の限界が近づいて来た初は、少しだけアプローチを変えることにした。

「言えよ」

「んんんんんっ?!?♥♥♥」

初はあたかも怒っていますよとアピールするように声のトーンを落として命令した。同時に握りしめた角からミシミシと軋むような音が聞こえるほど強く力を込める。その瞬間、兄の身体はビクビクと小さく飛び跳ね、それまで何とか自力で座っていたその身体を初によりかからせた。

「命令される方が気持ちいいんですか？ マゾなんですね。ほら、マゾの兄さん、ごめんなさいは？」

「あ……あ♥ごめん、なさい♥」

やっていないものはやっていない。絶対に認めない。そう決意して襲い来る快楽に耐えていた兄だったが、人生で初めてのロリマゾメス角アクメの衝撃はそんな決意を簡単に吹き飛ばすほど強烈だった。こんなものを続けられたら自分が自分ではなくなってしまう、死んでしまう。強烈なマゾアクメの恐怖に支配された兄は、歯をカチカチと

鳴らして媚びるような笑顔を浮かべながら何度もごめんなさいと初に謝罪した。自分が何に對して謝っているのかもわからないが、惚けた脳は謝れば許してもらえたとただそれだけを信じて謝罪という命令を発し続けた。

「良く出来ました。偉いですよ兄さん」

「えへ、えへへ……♥」

角は握られたままだが優しく頭を撫でる初の様子から、兄は許された、これで助かったんだと安堵しこれ以上初の怒りを買わないように笑顔を維持した。兄はこの時点では初に對する怒りはなかった。マゾメスアクメの余韻から回復し、正常に頭が働くようになったならば初の行為を糾弾したことだろう。だが、兄にとっては残念なことに、そして初にとっては当たり前に、これで終わるはずはなかった。

「それじゃあ悪いことをした兄さんには罰が必要ですね」

「え……？」

兄は一瞬、初が何を言っているのかわからなかった。

だって、謝ったら許してくれるって言ったから、ごめんなさいって言えば許してくれるって言ったから、だから悪いことしてないのに謝ったのに。

「これ、何だか知ってますか？」

先ほどまで立ったまま兄を見下ろしていた初が、座り込んでいる兄を後ろから抱える

ように腰を落とし、机の上に置いてあつた物を手に取り見せつけるように兄の目の前に持ってきた。

初が手に取つて兄に見せたそれは、一番最初兄がこの部屋に入った時に興味をひかれた見覚えのない工具だった。片手で持てるサイズの棒状のノコギリとでも言えば良いだろうか。少なくとも家の工具箱にはないはずのもので、だからこそ兄は興味をひかれたのだ。

とはいえ、その出所など今となつてはどうでも良いことだった。それを見せられた兄は、初が何をしようとしているのかを悟り、そしてそれがどれほど致命的なものであるのかを鬼の本能で理解した。

「やだああああああ!! 誰かたすk——むぐう!?!」

「助けは来ませんし暴れても無駄ですよ。ふふ、また一つお仕置きの理由が増えましたね」

それだけは絶対に駄目だと、初に抱え込まれた兄はそこから脱出しようと暴れ出したがすぐに腕力で無理矢理抑え込まれてしまう。もしも態勢が違えば逃げられたかもしれない。抱えられてしまったのがいけなかった。兄は初の全身で拘束されて逃げ出すことなど出来なかった。

助けを呼ぶために叫び声をあげようとしても、一旦工具を置いた初が手で兄の口を塞

いでしまう。

これこそが、ふたなりからT S娘への性犯罪が絶えない理由の一つ。

ふたなりが本気でT S娘を襲おうとすれば、T S娘は絶対に敵わない。

兄はそのことを何度も妹に言い含められ、わかつたつもりになっていたが何もわかつていなかったのだ。

そしてその代償を、愛する妹に支払うこととなった。

### 3 長女編（角折、本番）

確かに、額から伸びる角を邪魔だと兄は思っていた。これがなくなればどんなに良いかと思っていた。だが、それを折ったり、切ったり、削ったりすることは絶対にやっつてはいけないことだと本能で理解していた。だからこそ、この一か月ほど鬱陶しそうな素振り見せながらも我慢していたのだ。

その、鬼にとって命の次に大切だと誰に言われずとも理解している立派な角の片割れに、飾り気のない武骨な金ノコギリが当てられた。

それを当てられた途端、初の腕の中から逃れようと暴れていた兄の動きがぴたりと止まる。元から力づくで抑えつけられていたため大して動いてはいなかったが、それでもモゾモゾとした動きはあった。それが今、兄の意思で完全に停止した。

「お願い、お願いだから待って……」

「どうしたんですか兄さん？ 嫌なら抵抗しないと」

身体をびくりとも動かさず、されど涙を流しながら兄は懇願する。それだけはやめてくれと。それだけはやっつては駄目だと。しかし初はそんな兄の懇願を楽しそうに笑いながら聞き流し、まるで聞き分けの悪い子供を諭す様に、金ノコギリでコンコンと角を

叩く。

「さ、きから、っ♥」

「うわ、じつとしてください兄さん。危ないですよ。」

硬質な角にわずかに金ノコギリの刃が食い込んだ瞬間、兄の身体が弾かれたように飛び跳ね、初はとっさに金ノコギリを角から遠ざける。

こうなることがわかっていたので、兄は暴れるのをやめたのだ。ノコギリの刃が角に当てられた瞬間、動けば削れてしまうとわかっていたので。

当然、初だって兄が抵抗をやめた理由には気づいているが、わざわざその意図を汲んであげるつもりはさらさらなかった。

もう一度角の根元より少し上の部分に刃を添えた初が、すつとぼけたように兄に語りかける。

「抵抗しないってことは合意つてことですね。それじゃあお仕置きしますよ、兄さん。覚悟はいいですか？」

「待って♥ ダメ♥ 絶対ダメ♥」

甘イキからなんとか回復した兄が初を制止するが、そんな甘ったるい声で駄目と言われて止まるふたなりなど居るはずもない。むしろこんな媚び媚びの制止はもつとやって下さいというおねだりにしか聞こえなかった。

本當ならここで兄の言葉なんて聞かずに角を削り始めるつもりだった初だが、兄の献身的なおねだりを受けて良いことを思いついた。

「じゃあわがままな兄さんのために、気持ちを整理する時間をあげます。今から五つ数えたら動かし始めますから、それまでに覚悟を決めて下さいね。ご〜お」

「お願い♥ お願いだからやめて♥ やめてください♥」

「よ〜ん」

「なんでえ♥ 俺何も悪いことしてないのい♥ 何でこんなことするんだよお♥」

「さ〜ん」

「謝る♥ 謝ります♥ ごめんなさい♥ ごめんなさいい♥」

「に〜…:…やっぱり待ちきれません」

「待つ——あ、ぎやあ、あ、あ、い、ぎ、い、ぐうつ♥ い、ぎい、い、い、い

♥」

初は全身と左腕で包み込むように兄の身体を抑え、右腕に握った金ノコギリで左の角を削っていく。体勢的に非常に削り辛いのが、拘束を緩めればこのマゾメスは今までになく暴れるだろう。事実、超人である初にとつては難なく抑え込める程度ではあるが、角削アクメをキメている兄はこの拘束から逃れようとしていた時よりも強い力で暴れようとしている。

鬼の角は特別敏感な性感帯であり、その角を傷つけられるときこの世のものとは思えないほどの快楽を得る。それが、初が友人から得た情報の一つであり、半信半疑ではあったが信じたという気持ちの方が強かった。なにせあの兄が、自分たち四姉妹を育て、守ってくれた頼もしい兄が、幼い少女の姿で惨めにイキ狂う様を見られるかもしれないのだ。それを知った時、初はもう止まれなかった。それが誤った情報である可能性があつても、試さずにはいられなかった。

「兄さん ♥ 兄さん ♥ 兄さん ♥」

「お ♪ ぎ ♪ よ ♪ お ♥ ♪ ぶ ♪ ぎ ♪ い ♥ ♪ つ ♥ ♪ い ♥ ぐ ♪ う ♥ ♪ つ ♥ ♪ い ♥ ぐ ♪ う ♥ ♪ つ ♥」

「可愛い ♥ 可愛いです兄さん ♥」

眼球は限界まで上を向き、涙や鼻水を垂れ流しながら舌をだしている兄のその姿は、控えめに言つても無様でしかなく、常人からすればとても可愛いなどと呼べるようなものではない。だが初には、今こうして受け止めきれない快楽の波に溺れている兄の姿が、これまで見た何よりも美しく、淫らで、可憐に見えた。

「ん ♪ ぎ ♪ い ♥ い ♥ ん ♥ ぐ ♪ お ♥ お ♥ お ♥ ぐ ♪ お ♥ お ♥ ♥」

あまりにも激しいその声は最早喘ぎ声などという可愛いものではなく、獣の雄叫びのようだった。しかしそれすらも今の初には天上のしらべのように心地よく感じられた。夢にまで見たシチュエーション。現実で叶うことなどないと思つていた度し難い性癖。



それが今、ここにあった。

「あひ♥ おへえ……♥ ひぎっ♥ おっ♥」

時間にして数分といったところか。一本の角を削り折った初は、14cm程度のその角を無造作に机に放り投げ兄の額に残る断面を指の腹で優しくさする。すると角削りの余韻に浸りながら間抜けな声をあげていた兄が、弱弱しくビクビクと震えながら甘イキを繰り返す。

初の優しい愛撫を制止する声はなく、兄は角削りアクメの最中に意識を手放しており、与えられる刺激に対して身体が勝手に反応しているだけのようだった。

「よく頑張りましたね、兄さん」

意識を失った兄の頭と角の断面を優しく撫でながら、初は兄の衣服を脱がし始めた。

女児用の服を着るのを嫌がった兄は基本的に元々使っていたTシャツを一枚着ているだけであり、裸にするのにそう手間はかからない。

パンツだけはサイズの問題で今までの物が使えなかつた為、四姉妹でゴリ押しして女児用のモコモコとした白いパンツを履かせているのだが、Tシャツをめくってみると女児パンツはすつかりぐしよぐしよに濡れ黄色く変色してしまっていた。

いつのまにかおしっこを漏らしてしまっていたらしい。

シャツと同様にパンツも脱がせた初は、ウエットティッシュで簡単に身体を拭いてか

ら意識のない兄をベッドにうつ伏せに横たわらせた。

初にとつての最大の目的は、強く優しく頼もしい兄を無様にイキ狂わせることであり、それはほぼ達成されたと言える。しかし当然、性癖を刺激されれば欲望は肥大化し、それは放出しない限り収まらない。

つまり、ここまでの行為は前戯に過ぎない。

初は自身の衣類を脱ぎ捨て、痛いほどに硬く大きくなつた自身の男性器を兄のぷにおまんこに覆いかぶさるように添える。挿入していかない、ただ入口に接触させているだけであるにもかかわらず、初は自分でしごくの何倍もの心地良さを感じていた。

初は今すぐそこに突き入れたくなる情動を何とか堪え、その幼いつるつるのプニマンを目に焼き付ける。まだ誰も迎え入れたことないそれはぴつたりと閉じており、芸術品のような美しさすら感じられる。それを今から自分が汚すのかと思うと、初は優越感とも背徳感ともとれない奇妙な高揚を抱いた。

「行きますよ、兄さん♥」

「あつ♥ んっ♥」

荒々しく無慈悲に角削をしていた鬼畜と同一人物とは思えないほど優しい挿入。

角削によつて強制的に何度もマゾメスアクメをキメさせられた幼おまんこはすつこりホカホカヌクヌクの極上ロリマンコに仕上がっており、穴の小ささによるキツさはあ

れど、まるで迎え入れるように初の極太チンコを呑み込んでいく。

「お、おっほ♥」

「ん……♥」

腰が抜けそうになるほどの気持ちよさ。兄のクソザコマゾおマンコは生意気にも初の精液を搾り取ろうと絡みつき、早漏♥ よわよわちんこ♥ おもらししちやえ♥ と痛いほど締め付ける。

いかに初が支配種族であるふたなりとはいえ、初体験でこれほどの極上おマンコが相手では苦戦も致し方ない。つつい間抜けなは喘ぎ声を漏らしてしまったのも、責められるほどのことではないだろう。しかし他でもない初自身が、このような片角メスマゾガキを相手に喘ぎ声をあげさせられたことが許せなかった。

こみあがる射精感を気合で抑え込み、初はふわとろメスガキマンコへの進撃を再開する。

だが、ある程度進んだところで初の凶悪オチンポは柔らかな壁に遮られた。処女膜だ。初のマゾメス殺しオチンコはまだ半分も挿入されていないというのに、これ以上はダメ！ 通行禁止！ とでも言いたげにその歩みを邪魔している。

生意気だった。

「もう我慢できませんー！」

「おほお♥!? いぐ♥!? あちゅ♥ あちゅいい♥!?!? いぐうつ♥! いぐううつ♥  
 !」

初が手加減しながら挿入していたのは、なにも兄を思いやつてのことではない。単純に、自身の男性器を兄のロリマンコに添えた時点で下手をすればすぐに出しかねないとわかっていたからだ。別に一度射精したくらいでふたなりの性欲が底をつくことはないが、単純にプライドの問題だった。

角を折られ半ば屈服状態のザコマゾメスを相手に、セックスで自分が先に果ててしまうのはあまりにもプライドが傷つくことだ。鬼は角が性感帯で、それを削れば兄を屈服させることが出来ることはわかっていたが、ぴっちり閉じられたロリオマンコまであつさり陥落するかはわからなかった。

だが、蓋を開けてみればどうか。マゾメスの分際でふたなりのオチンポを通行止めするなどあまりにも生意気過ぎてつい勢いよく貫通させていぶにぶにの子宮口にキスしながら膣内射精してしまつたが、結果は御覧の有様だ。

まずは処女膜を破られた痛みで覚醒すると同時にマゾアクメをキメ、次いで膣内を勢いよく擦りあげられた感覚と子宮を殴りつけられた痛みでマゾアクメ、更にはグツグツと煮えたぎる様な大量の精液を膣内に浴びてマゾアクメ、終いにはカリ高オチンポを引き抜かれる時にもマゾアクメだ。

初のぶっといオチンポが引き抜かれた小さなメス穴からごぷりと粘性のある白い液体が零れだし、トロトロとシートへ流れ落ちる。その合間にも、兄は小刻みに身体を振るわせてオチンポの余韻で甘いキを重ねている。

実は鬼に限らずTS娘は、一度屈服させられた相手に本気で命令されると逆らえない性質があり、しかもその状態になると普段はほとんどないはずの性欲が沸き上がり、全身の感度が良くなるというおまけ付きだ。加えて鬼の場合、角を激しく刺激されることで全身の性感が数年単位で調教を受けたレベルまで花開いてしまう。

つまり兄は、TS娘としてふたなりである初に負けた時点で今後一生の隷属が決定づけられており、更に角を折られたことで何をされてもマゾアクメしてしまう負け犬であることが確定したのだ。

一体何を心配する必要があっただろうか。初は自分のプライドが守られたことに安堵すると同時に、このようなクソチョロマゾメスの分際で自分を一瞬でも躊躇させたことに怒りを覚え、先ほどまでの穏やかな腰使いが見る影もないほど激しく腰を叩きつけ始めた。

「この♥！ 兄さんのくせに生意気なんですよ♥！ イケ♥ 逝け♥ あくもうこのオナホ気持ち良すぎます♥ 兄さんが悪いんですよ♥ いつつも私を誘惑して♥！ 謝りなさい♥！ オラ♥！ マゾアクメしなさい♥！」

「やめでえ♥ ゆるじでえ♥ おっ♥ いぐっ♥ ごめんなさい♥！ ごめんなさい♥ ゆるしてくらひやいいい♥!!」

角を折られたこととアクメ漬けにされていることが原因で兄の知能は大幅に低下していた。自分が何に対して謝ってるのかもわからないままこのアクメ地獄から抜け出すためだけに謝罪を繰り返す。

そうして何度も何度も幼穴を貪られ、受け止めきれないほどの快樂に意識が焼き切れそうになったころ、ようやく初の力強いピストンが止まった。

やっと終わったのかと、疲れ切った体とすり切れた意識の中で、ふと視界の端に映ったのは金ノコギリを持って自分に多い被さろうとする初の姿だった。

「あ……♥ ああ……♥」

兄の額にはまだ一本の角が残っている。

ここまでやった初が、果たしてその一本を見逃すことなどありえるだろうか。

兄は自分の身に降りかかる運命を理解し、ひきつった笑顔を浮かべながら涙を流した。

## 4 長女編（強制おねだり、窒息、イラマ）

初のベッドの上でうつ伏せに寝かせられていた兄が、薄い尻を少しだけ突き上げて左右にふりふりと動かしている。その姿は一見してオスを誘う淫らなメスのように見えるが、それをやっている兄はよほど恥ずかしいのか顔を枕にうずめて隠してしまっている。

「うう……、ひぐっ……わ、私はういおねえちゃんのマゾ奴隷です……。雑魚メスの角を折ってくれて、あ、ありがとうござい、ます……。いつでもどこでも……ぐすっ……ハメハメオツケー、です……。おねえちゃんの、お、お、オチンポ様で……。私のロリロリおマンコ……ずぼずぼしてください……。つよつよ精子で孕ませてください……」

初に表情を見られないようにするためか兄はほんの少しだけ枕から顔を離して、可愛らしい尻を振りながら心底嫌そうに、涙ぐみながらそう言った。お尻を振る兄の姿をその後ろから観察している初には確かに表情は見えないが、枕で隠しきれない耳が真っ赤に染まっているのを見て、羞恥と屈辱に震える兄の姿に興奮が高まった。

当然だが、兄は自分から望んでこんなことをしているわけではない。誘うようにふりふりと尻を振る滑稽な仕草も、媚びるような無様な口上も、考えたのは全て初だ。兄の

片角を折り、その痴態で高まった性欲を兄をオナホに見立てついでのように発散した初は、次に兄の心を辱めようとしたのだ。

もちろん兄も最初は反抗した。無理矢理角を削られるのは最早どうしようもないが、兄の意思だけは腕力で自由にするには出来ない。初から受けた性的蹂躪のダメージはまるで抜けきっていないが、それでも兄は気丈に初の要求を跳ね除けた。

だがその選択は、今の初に対して一番やってはいけないことだった。

初は気高い少女を辱めることに異様なまでの興奮を覚える特殊性癖持ちの異常者だ。弱点である角をゆっくり時間をかけて削られ、力任せに組み敷かれたメスガキがそれでもなお心折れずに反抗するなど、そんなのは初の好物だ。

最初から大人しく従順にしていれば、あるいはそこでこの凌辱は終わっていたかもしれない。しかし、兄は立ち向かってしまった。立ち上がってしまった。まさしく兄は、アニメの中のヒロインのように夢と希望に満ちた正義の人だった。そして、初は薄い本に登場する魔王だった。

兄はわかっていたいなかった。この世界がもしもニチアサの世界だったなら、初の邪な心を救えていたかもしれない。何かこう特別な家族の絆なんかで丸く収まっていたかもしれない。しかしこの世界は、ニチアサか薄い本かの二択で言えば間違いなく薄い本の世界なのだ。



無様な種乞いダンスとハメ穴奴隷宣言を要求された兄はその瞬間こそハッキリとそれを突っぱねたが、初が兄の頭を枕に押さえつけ、もう一本の角に金ノコギリの刃を当てるとそれだけでガクガクと腰を振るわせてピュツと小さく潮を噴いた。

上下関係は一本目の角を削り折られた時点で兄の身体に明確に刻み付けられていた。ただ、自分が敗北アクメ大好きなマゾメスであることを身体に教え込まれたばかりの兄は、頭がそれに追いついていなかったのだ。

一本目の時と同じように初がゆっくりコンコンと角を叩くと、そのたびにプシュツ、プシュツと潮を噴きながら腰が飛び跳ねた。枕に顔を押し付けられていたことで獣のようなクツソ無様な喘ぎ声は響かなかったが、代わりにくぐもった鳴き声が初の鼓膜をくすぐった。

頭を抑えつけていた手の力を緩め、角を握って顔を持ち上げた初が見た兄の顔は、勇気を振り絞って巨悪に立ち向かうヒロインのそれではなかった。快楽に頬を上気させ、甘い絶頂を迎えたことでトロトロにふやけた表情。それでいて瞳の奥にはふたたび角を削られることへの恐怖があり、端的に言えば敗北者だった。

そうして完全に心を折られてしまった兄に対して、初は一つ提案をした。それは、先ほどのお願いを聞いてくれるならもう一本の角は折らないであげるというものだった。

初が本当にその約束を守る気があるのか兄にはわからなかった。しかしそれでも、も

う角を削られないという魅力には抗えなかった。あの暴力的な快楽を次に味わえば自分がどうなるかわからない。あんなもの、二度と耐えられる気がしなかった。

だから兄は、初の言うがままに尻を振り奴隷宣言をした。それで例え犯されることになったとしても、角を折られるよりは遥かにマシだと思つて。

「ぷつ、ふふ、恥ずかしいんですけどか、兄さん」

「つ——、は、恥ずかしいマゾガキでごめんなさい……！ バカでエッチなマゾメスに、お仕置き、してください……！」

思わずと言つた様子で失笑する初に、兄はあらかじめ言い含められていたセリフで答える。

「恥ずかしいに決まっていた。それでも角を折られないためにと耐えた。」

「兄さんがそこまで言うなら使つてあげますよ。ほら、いつまでお尻振つてるんですかっ！」

「ひいつ♥!？」

言われたとおりに振つていた兄のお尻を初が理不尽に叩くと、兄は痛みに対する反射的な悲鳴をあげたがその声音はどこか気持ちよさそうでもあった。そのことを敏感に感じ取つた初はスパンキングで兄を責めようかと一瞬考えたが、内心で首を横に振る。自分でやらせておいてなんだが、兄の可愛いハメ乞いダンスはチンコにきていた。

我慢の限界を迎えた初は兄の背後からのしかかるように、バキバキに勃起した剛直をその秘裂に突き入れた。

「——♥！ んんんん♥！」

「何言ってるのかわかりませんよ、兄さん」

浅い幼穴の一番奥を容赦なくノックするのと同時に、初は兄の頭を再び枕に押し付ける。そのまま腰を引きまた叩きつける。

普通なら兄の小さな身体に初の巨根が全て収まるはずはない。しかし現実として、兄のぐずぐずに蕩けたロリマンコは初の化け物染みた男性器を全て呑み込んでいた。その極太チンポが根本まで突き入れられるたびに、兄の子宮は強引に押し上げられてお腹がボコリと膨らむ。

そんなことをされればとんでもない痛みが伴うはずなのだが、初に屈服しオナホと化した兄の身体はその痛みすら快感に変換し強烈なアクメをキメていた。

「んもっ♥ むううう♥！ んむー♥！」

「ほんつと、何回使つても最高です♥ あー♥ 射精ます♥ このマゾオナホ♥！ 孕め♥！ 私の赤ちゃん産みなさい♥！」

兄の頭を押さえたまま龟头をぐりぐりと子宮口に押し付け、成人男性の十回分すら優に上回るほど大量のドロドロ特濃精液を放出した。

TS娘は本当に都合が良く、まるで最初からふたなりの性奴隷になることが決定づけられたような種族だ。その証拠に、大量射精を子宮口に受けた兄は先ほどまでじたばたと暴れさせていた足をピンと伸ばして中出しアクメをキメている。

そもそもが大した前戯をせずともあつという間にまたぐらを濡らし、挿入されればそれだけで軽く果て、一切調教を受けていない子宮口ですらアクメをキメる始末。

しかも一度屈服させられた相手には逆らえず、普段は性欲なんてほとんどないくせにその相手にだけは幼女とは思えないほどメス臭いフェロモンをまき散らす。

さらにこれはまだ時間が足りずにほとんどの人間が知らないことだが、TS娘には通常の生理というものが存在しない。四姉妹たちは兄に生理が来ていないことからまだ子供を作ることとは出来ないと思っているが、それは大きな間違いだ。TS娘は屈服させられた相手に子作りを強要された時か、もしくは自分がこのふたなりの子供なら産んでも良いと心から思ったその時に排卵するのだ。

こんなものを放っておいたらいざれ他のふたなりにレイプされ奴隷にされるのは確定的に明らかだった。

「ほら、兄さんの中で汚れちゃいました。綺麗にしてください」

「ああ………♥へあ………♥?」

ようやく頭を押さえつけていた初の腕から解放された兄は窒息寸前で意識が朦朧と

しており、初が何を言っているのかまるで理解出来なかった。

そんな兄の様子に焦れた初は、残った角を掴み力づくで強引に兄の上半身を起き上がらせる。

「お、っ♥起きる♥起きるから乱暴にしないで♥」

「兄さんがちゃんと綺麗に出来たら考えてあげますね」

「き、綺麗について……、まさかこれを……♥？ うっ、臭い……♥」

目の前に突き付けられた初のオチンチンは射精後の半勃起状態でもすでに兄の顔よりも大きかった。しかも、精液と兄自身の愛液が混じりあったからなのか、鼻につく異臭を放っている。少し距離を置いて匂いを嗅いでいるだけでも頭がクラクラするほど強烈な悪臭だ。

こんなもの舐められるはずがない。兄はそう口に出したかったが、立ち上がって角を握りながら自分を見下ろす初の威圧感がそれを許さない。初から催促の言葉はなかったが、徐々に角を握る手に力が込められているのを感じ取った兄には、最初から選択肢などなかった。

本当なら絶対に、絶対に嫌に決まっているが、やらなければ角を折られるという恐怖に負けて、兄はゆっくりとグロテスクでくっさいチンポへ舌を近づける。

「ちよっと待って下さい」

「えっ？」

舌先がオチンポに触れるか触れないかというギリギリのところまで初からの制止がかり、咄嗟に兄は顔を引つ込めた。もしかしたらやつぱりやらなくても良いのかと少しだけ期待を抱いて。もちろん、そんなわけはないのだが。

「舐める前に先っぽにキスしてください♥」

「な、なんでそんなこと……、おう♥ わか、わかりましたからあ♥」

反抗したくても、疑問を抱いても、角を強く握られるだけで兄の心はあっさりと屈服してしまう。強要されたわけでもないのに無意識に敬語を使ってしまうことからも、兄がどれだけ初に対して服従しているのかがわかる。

「う、ううう……♥」

舐めるのもキスするのも大して違いはないかもしれないが、あえてオチンポにキスをしろと言われ意識させられたことで、兄は何だか普通に舐めて綺麗にする以上に恥ずかしい行為をさせられているような気がしていた。しかも兄に異性経験はなく、これはいわゆるファーストキスにあたる。夢見る乙女じゃあるまいし、兄がファーストキスという行為に強い思い入れを持っていたわけではないが、それでもこれはあんまりだという気持ちもあつた。

「ん、ん〜♥」

ギョツと目を閉じて唇を突き出し少しずつチンポの先端に迫っていく兄の姿はひどく滑稽だった。その向かう先にあるものが精液に塗れ我慢汁をだらだらと流すグロテスクな肉棒でさえなければ、とても愛くるしく映ることだろう。

ちゅっ♡ つと唇と亀頭の先端が優しく衝突。

すると、甘勃起状態だったそれが見る間に凶暴な本性を露わにした。

最低なファーストキスの感触に思わず目を開いてしまった兄は、TS前の自分のものを遥かに上回るその威容に気圧されて何も言うことができない。

「……れろ♡ ちゅば♡ ちゅ♡ ん♡」

何を言われるでもなく、角を強く握られるまでもなく、兄は自主的にその汚物を舐め始めた。雄としての圧倒的な差を見せつけられたことで、無意識的に敗北を認めてしまったのだ。そして、どうせ抵抗しても無駄だと諦めてしまった。

大人しく従っている内はそれ以上ヒドイことはされなければと自分に言い聞かせ、心を殺して一心不乱に奉仕する。

「はあ、全然駄目です兄さん。そんなんじゃないつまで経つても終わりませんよ」

「え……？」

奉仕が始まってからしばらくの間沈黙を保っていた初が、呆れたような声で兄の頭に右手を添えた。左手はずっと角を握っていたため、両手で兄の頭を持っているような状

態だ。

兄は投げかけられた言葉と添えられた手から不穏なものを感じ取って思わず呆けてしまった。間抜けにポカんと開かれたマゾメスの口内に、勢いよく初のチンポがねじ込まれた。

「嘔むな！」

「っ♥!?! ん、ぼお、♥」

一度屈服させられたふたなりの命令に、TS娘は逆らうことが出来ない。

突然喉奥に挿入されたそれを兄は反射的に嘔み千切りそうになったが、初の命令を受けて顎に力が入らなくなった。もつとも、仮に命令がなく歯を立てたとしてそれを嘔み切れるかはわからないが。

枕に押し付けられるゆるやかな窒息と比べ、喉奥に初のつよつよチンポをぶち込まれるのは大きな苦痛を伴うものだった。兄は初の命令を遵守して歯を立てることこそなかったが、目に涙を浮かべながら小さな幼舌で懸命にそれを押し返そうとした。だがそんなものは初の悪辣オチンポにちよつとした快感のアクセントを与えるのみ。

同時に、兄は自身の目の前にある腰を非力な両腕で必死に遠ざけようとするが、逆に離れないように初に頭を押しさえつけられているため何の意味もない抵抗だった。

兄のささやかな抵抗は苦しみを和らげるところか、初に生意気だと判断されてより強



烈な苦痛を呼び込むこととなる。

初は押さえつけた兄の角と頭に力を込めてその場に固定し、あろうことか腰を振り始めたのだ。

「ごえ、っ、ん、ぎゅう、ぼえ、え、」

「おっほ、やっべ、TSロリの口マンコ具合良すぎです！　こんなのすぐに射精ちやいます、一滴も漏らしちゃ駄目ですよ兄さん！　零したらお仕置きです、イク、イクイク！　射精る！！」

ほんの十数回腰を振ったのち、スパートをかけるように初の腰の動きが加速し始め、最後は思いきり奥まで突き込んで喉奥に直接精液を流し込む。

「ああ、さいこうです、兄さんはさいこうのロリオナホです……」

「お、げえ、う、お、え、げえ、え、」

最後の一滴まで尿を切るかのように、気持ちよさそうにぶるぶると身体を揺らした初が満足そうに兄の小さな喉から大きなチンコを引き抜いた。当初の目的通り、それに付着していた精液や愛液はキレイになくなっていくようだが、今度は兄の唾液でぬらぬらと厭らしい光沢をまもっている。

一方で何の心構えもなく喉奥を蹂躪された兄は、流し込まれた精液を全て飲み込むことが出来ずその一部をベッド上に零してしまっていた。

「はあーっ♥！ はあーっ♥！ げほっ♥ ごほっ♥！」

初の言いつけを守ることが出来なかったことで兄はお仕置きされることとなるのだが、今の兄にはそれに気づく余裕もなかった。マゾロリ鬼娘である兄は強制イラマでも当然のようにアクメをキメていたが、それと死にそうになったこととは話が別だ。今回の責めは本当に死んでしまうのではないかと思うほど、拷問と言っても過言ではないほどに苛烈だった。

このままでは死んでしまう。大人しく言うことを聞いてれば良いなんて、そんな悠長なことを言っていられない。兄は本気でそう恐怖した。なんとか隙をつけて逃げ出さなければ実の妹に殺される。それも性的な玩具のように扱われて、人としての尊厳もなく。

もしもあと少しだけ早くその決意が出来ていれば、もしかしたら逃げ出す機会があったのかもしれない。しかし、兄のその決断は少しだけ遅かった。

「今日は凄く良い日でした。長年の夢が叶いました」

唐突に、初が晴れやかな顔で、満足しきったような声音で喋り出した。

そもそも兄はどうして初がこんな暴挙に及んだのか全くわかっていない。ハッキリ言うとは、大災害の影響で頭が狂ってしまったのかと疑いもした。

ただ、今の初はさつきまでとは何かが違っていた。何もかもやりきったというよう



初はそんな兄の痴態を楽しそうに眺めながら動画に記録し、兄が意識を失ってから後片付けに取り掛かった。

一通りの後始末が終わった後、兄の額に残る角の断面が少々不格好なことに気づいた初は紙やすりでその形を整えてやることにした。当然、作業中兄は何度も絶頂を迎え折角着替えさせた下着やTシャツを濡らすこととなったが、これはそのことを予測できなかった初の落ち度。作業が終わってから再度兄を着替えさせ、後始末が完全に完了した。

そうして現在、時刻は午後三時を回ったころ。あと二、三時間もすれば次女の和が帰ってくる。

それまでに兄が目覚めるか、仮に目覚めたとして記憶はどうなっているか。

その結果によって初の人生は大きく変わることになる。

初が鬼幼女の弟を持つ友人から手に入れた情報は、鬼の角が性感帯であるということ。

だが、もしも教えられた情報がそれだけだったのなら初とてこんなことはしなかった。いくら初がその身の内に鬼畜の本性を宿していたとしても、それだけなら兄を襲うことはなかった。

初が今回の計画を実行することを決めたのは、友人から教えられたもう一つの情報が

あつたからだつた。それは鬼の角を折るとどうなるのかという結果。

一本折られただけなら致命的な影響はない。

その精神に角を折られた相手への永遠の服従が刻まれるだろう。

角を失つたショックから一時的に精神が幼くなることはあるだろう。

それでも、その精神性や記憶、人格が失われるわけではない。

だが二本、鬼の持つ二本の角が両方とも折られた場合、その鬼は知性をなくす。

角は鬼という存在の象徴。それを完全に失つた時、一つの人格にとつて重大な何かが失われるのは当然といえば当然のこと。

「んみゆ……、ういおねえちゃん……？」

穏やかに寝息をたてていた兄が目を覚まし、近くで見守っていた初に声を掛けた。

その声音には己の眠りを見守っていることへの疑問が含まれていたが、怒りや恐怖といった負の感情は内包されていなかった。

あれほどの非道を受けて、怒ることも恨むことも、それどころか怖がることすらしないなど本来ならばありえない。そう、その記憶がなくなつてもいけない限りは。

初が友人から聞いた通りの症状だつた。

角を全て失つた鬼は、知能が幼児レベルまで下がり記憶のほとんどが失われる。

しかし全てを忘れてはいるわけではなく、長く積み上げられた常識や人物のことは中途

半端に覚えていて、矛盾が生じないように自然な形で再構成される。

つまり今の兄は、これまで男として生きて来た記憶や経験、そしてつい先ほど行われた極悪非道の凌辱すらも忘却し、自身のことを四姉妹の妹として認識しているのだ。

初は賭けに勝った。

自分の欲望の赴くままに兄を蹂躪し、その上で幼児化した兄に愛すべき家族として認識されている。

「ういおねえちゃん、おやつたべたい」

「そうですね、ちようど私も食べたいと思つてたんです。一緒に行きましようか」

ぐしぐしと眠たそうに眼をこする兄の手を引きながら、初は人畜無害そうな優しい微笑みを浮かべていた。

## 5 いじめ編（拘束）

大災害により世界中の男性が異種族幼女化し女性がふたなり化した日からおよそ2カ月ほどが経ったある日のこと。

ふたなり化によって暴走していた女性の性欲が時間経過で落ち着き始めたことや、社会機能の回復に比例して悪化していた治安は徐々に改善され、日本に限って言えば表面上平和な日常が取り戻されつつあった。

その事実と、いつまでも学校を休ませるわけにもいかないという兄の至極当然な発言により、四姉妹の監視はなくなり兄の外出制限も解除されることとなった。

とはいえ、いつの間にか退職させられていた職場に今更戻ることも叶わず、かといって再就職をしようとすれば四姉妹の妨害を受けるため、端的に言って兄は暇だった。

そこで兄は、折角子供の身体になったわけだし、たまには童心に帰って探検でもしてみようかと外へ繰り出すことにした。

お昼を済ませた時間帯、ちようどお天道様が一番高いところから子供たちを見守ってくれているところであり、幼い身体には少々堪える暑さであるため、兄は涼し気な白いワンピースに袖を通し大きな麦わら帽子を被って冒険の地へ繰り出した。

本当はこんなあまりにも可愛らしい服装をすることに抵抗はあったのだが、いつまでも嫌がる兄に業を煮やした妹たちが男物の衣服を全て捨て去り、いつのまにか女の子らしい洋服を買い揃えてしまった。

そうなつてしまえば兄としても何も身に着けずに外出など出来るはずもなく、ヒラヒラとしたスカートの頼りなさに洗面を浮かべつつ女の子コーデを受け入れる運びとなった。

白く小さいあんよにフィットしたサンダルがペタペタと微笑ましい音を立て、お財布やスマートフォンをしまったヒョコ型の肩掛けポーチが揺れる。

兄にとつては見慣れたはずの景色も、視点が変わればどこか新鮮で、知らない町にでもやつてきたような不思議なワクワク感があった。

身体に合わせて心まで若返ったのか、あるいは普段は大人の振りをしているだけで人の本質とは子供の頃から変わっていないのか、難しいことは兄にはわからないしそもそも気にもしていないが、普段であれば通らない民家と民家の間の細道や、雑草萌ゆる茂みをかき分けながら、好奇心に導かれるまま歩み続ける。

そうして未知を解き明かすにつれて、それが未知などではなく、忘れていただけだったことを思い出していく。

昔よく行つた駄菓子屋。



近所の子供が集まる大きな公園。

小学生の頃に仲が良かった友達の家。

新鮮さはいつの間にか消え失せ、兄は懐かしさと同時に寂しさを感じた。

難しいことなんて何も考えないで、心配事なんて一つもなくて、無邪気に遊んでいたあの頃。

あんなに仲良しだった友人たちも都会へ出て行ってしまい、この町に残っているのは自分だけ。

思い出を辿るように一つ一つ、幼少期の遊び場へ足を運んだ。

どれほどの時間そうしていただろうか。

夕方の5時を知らせる鐘の音で、兄はようやくもうそんな時間なのかと我に返った。

夏は日が長く、空の青さは健在だが、四姉妹の何人かはすでに帰宅していることだろう。あまり長く外に居ては余計な心配をかけるというもの。

兄は仕方なしに、とある小さな公園を最後の目的地に定め、止めていた足を再び動かし始めた。

夕方の5時ともなれば小学校もとつくに終わっている時間で、元気な子供というのはランドセルを背負ったまま公園に集合していた遊ぶというのも珍しくはない。

しかし兄が最後に足を運んだ公園は本当に小さなところで、遊具など鉄棒と砂場が申し訳程度に設置されているだけの不人気スポットだ。兄が子供の頃もわざわざこちらの公園で遊ぶことはあまりなかった。

しかもそもそも住宅街や駅前、小学校などからは離れた場所にあり、アクセスが悪く人通りが少ない。

だから、そこに子供がいることに気が付いた兄は少しだけ驚いた。

カラフルなランドセルを背負った、高学年くらいの背丈に見える3人の女の子たちが、同じくらしいの背丈の女の子を囲んでいた。

「あんた家に帰れないから一人でこんなところにいるんでしょ？」

「あたしたちが一緒に遊んであげるって言ってるじゃん」

「や、やだっ！ はなしてよ！」

「こら！ 大声出すな！」

「んぐう!?!」

「あんたの声の方がうるさい」

三人の少女は囲まれている少女の身体を掴んで逃げられないようにしており、されに

口元を手のひらで覆って助けを呼べないようにしてしまった。

兄が目を凝らしてよく見てみれば、囲まれている少女の頭髮は限りなく黒に近い青色で、それ以外の外見的特徴は見当たらないが異種族幼女、つまりTSした男の子のようだった。

今の外見年齢的には兄の方が少女たちよりも少し低いくらいで一緒に遊んでいても違和感はまったくないが、そうは言っても中身は成人済みの男性だ。

変に声をかけて事案扱いされてはたまらないと、当初は少女たちの邪魔をしないように隅っこの方に隠れて懐かしさを感じようとしていた兄だが、聞こえて来た会話の剣呑さや目に映る状況から流石に見て見ぬふりをするには出来そうもなかった。

「ちよつと、あー、君たち？ いじめは良くないと思うよ」

いきなり頭ごなしに叱りつけても子供は反発するものだということを身をもって知っているため、兄は少女たちの前に姿を現し子供をなだめるように穏やかに声をかけた。

「なにあんた、子供はどっか行つてなさい」

おそらくリーダー格と思われる、少しツリ目の気の強そうな少女が不機嫌そうに吐き捨てた。

自分も子供くせにこのような物言いをするのは、兄を自分たちよりも年下だと思つて

いるからだ。実際見かけだけはそうなのだから仕方のない話だった。

「俺は大人だよ。君たちも知ってるよね、大災害。今はこんなんだけど、大人の男の人」  
兄は自分のことを指さしながら大人であることを強調する。

兄自身、小学生の頃は中学生でさえ大人に見えたものだ。そして大人というのは自分たち子供とは違う、言葉で言い表せないような、別次元の存在のように感じられた。

だから自分が大人であると言うことを少女たちが理解すれば、大人の前でいじめをしようなどとは思わないだろうと考えた。

「え、大人？」

「ほんとに？ 先生とかお父さんみたいになってこと？」

「そういえば角生えてるし髪も緑だ……」

「ほら、放した話した」

少女たちが大人の登場にざわついてる間に自然に歩いて近づいていくと、そんな兄に気圧されたのか少年を拘束する少女たちの力が少しだけ弱まった。

「ごめんなさい！」

「あっ！ 待て！」

その瞬間、少年は精いっぱい力で暴れ出し少女たちの腕を振り払って走り去ってしまった。去り際の言葉が感謝ではなく謝罪だったことに兄は少しだけ疑問を覚えつつ、

少年を追いかけようとする少女たちの前に立ってその行く手を阻む。

「虐めなんて恥ずかしいことなんだよ。お父さんやお母さんが知ったらきつと悲しむ。他にも楽しいことは一杯あるから、こんなことはもうやめよう」

「うぎ。なにこいつ」

「ちびのクセに説教してんじゃねーよ」

「白けるわー」

まだ小さい子供だから、誠意をもって向き合えばきつとわかつてくれると信じ、兄は少女たちを説得しようとした。しかし少女たちには響かない。そもそも兄は一つ勘違いをしていたのだ。いじめはいじめかもしれないが、少女たちがしようとしていたことは、大災害前の兄が想像しているような陰湿ないじめではなかった。

「つーかもうこいつでよくない?」

「あ、いいじゃんそれ!」

「大人つつつてもあたしより小さいし」

不穏な会話をしながら、三人の少女がギラギラとした視線を兄に向けた。

少女たちの目を見て話している兄は気づいていないが、よく見れば少女たちのスカートの前が不自然に持ち上がっている。第三者から見れば、少女たちの目的など一目瞭然だっただろう。

理由はわからないけれど、身の危険を感じ取った兄が無意識のうちに後ずさりするが、少年を助けるために近づいていたことが仇となった。

兄が逃げようとしていることを感じ取った三人の少女は、弾かれるように兄に襲い掛かった。

「ちよー！ やめなさいー！」

ふたなりが成人済みの場合、TS娘は絶対に腕力では敵わない。では、ふたなりが子供の場合はどうか？ TS娘の種族やふたなりの個人差、それから何歳程度を想定するかにもよるが、今回の場合に限って言うのなら、その力は拮抗していた。

「ふー、ふーらー！ いい加減に……っ！」

ただしそれは、一対一である場合の話だ。

少女一人と兄の腕力はほぼ同じだが、それはつまり三体一では絶対に敵わないということの意味する。事実、二人がかりで腕を押さえられ、その間にもう一人に足を取られて転がされ、なす術もなく仰向けで地面に拘束されてしまった。あつという間の出来事で、とても初めてとは思えない早業だった。

転んだ際に外れてしまった麦わら帽子がそよ風に吹かれて転がっていく。

「なわとび出して」

「ガムテちようだい」

「はいよー」

「や、やめろ！ やめ——ん〜！」

三人がそれぞれ兄の右腕、左腕、両足の上に座って体重で押さえ込む。

その間兄はまともに抵抗することが出来ず大人としての対面を保つ余裕もなくなり乱暴な言葉で少女たちを制止するが、それで悪童が止まるはずもなく、両腕と両足をなわとびで縛れら口にはガムテープを張り付けたられた。

あまりの急展開に兄の思考は全く追いついていなかった。

だからなぜそんなものがランドセルから出てくるのか、少女たちが先ほどまで絡んでいたTS娘に何をするつもりだったのか、これから自分がなにをされるのか、その真意に気づけない。

「クラスの男子と大差なかったね」

「ね〜。大人も大したことないなあ」

「今度先生もやっちゃおうか」

「ふむ——！」

兄は自分の身体の上に座って談笑を始めた少女たちを睨みつけるが、少女たちはどこ吹く風だ。兄にしてみればこんな目に合っている時点で十分すぎるほど屈辱を味合わされているため怒りを抱くのは当然だが、少女たちにとっては下準備が終わって一段落

という段階でしかない。本番はここからなのだ。

大災害以来、四姉妹によって半ば軟禁されていた兄はふたなりに対する理解が浅い。ニユースやネットから得られる知識としては認識しているが、その脅威を実感できていない。だから今、目の前の少女たちがふたなりだということが、何を意味するのかかわらない。

「わざわざ脱がしやすいく服着て来たんだね〜」

「ほんとは最初っからこうされたかつたんでしょ?」

「角とか尻尾があるやつは大体そこが弱いんだよね」

「んん?! んうー!! んむお♥!?!」

少女たちは談笑を続けながら、何でもないことのように兄のワンピースの裾をまくり上げ、ノースリーブの脇から手を差し込んで胸を触り、硬質な二本の角を強く握りしめた。

兄の反応は実に顕著で、下着をはぎ取られてびったりと閉じた秘裂をなぞりあげられるとぞわぞわとした慣れない感覚に暴れ出そうとし、ギユッと痛むほど強くつまみあげられた乳首への刺激にさらに激しく暴れようとし、握られた角から送られてくる頭を焼き焦がすほどの破滅的な快感に身体を跳ね上げようとしたが、その全てが少女たちによつて押さえつけられ、快楽を逃すことも出来ず、何が起きたのかわからないまま人生



で初めてのメスイキを無理矢理にキメさせられた。

## 6 いじめ編（本番、絶頂報告）

大災害は神罰である。

世の中には、そんな言葉を本気で信じている者がいる。なにせ、これまでの科学では到底説明のつかない現象であり、その内容にしても何らかの意思が関わっているとしか思えないからだ。

大災害の発生前、世界では表面上男女平等がうたわれ、性差別の解消が推進されていた。しかしどこまで行っても結局のところ、原始的かつ生物的な役割、力関係というのは平らに出来ない。

口には出さずとも、あるいは思考に上がらずとも、誰もが理解していたのではないだろうか。女性が完全に男性の支配から逃れられることはない。

その暗黙の支配構造が、大災害によってひっくり返った。それも、今までのそれよりもより致命的かつ明確に。

男性は非力で小さな少女の身体に、女性は男性の象徴を獲得し強い力を入れた。しかも、少女化した男性は例外なく性的暴力に対して無力であり、少し性感帯を触られればあつという間に発情させられ、性感帯ではないはずの場所ですら少し開発されれば

感じるようになってしまう。女性が望まなければ妊娠せず発情もしないくせに、女性に望まれれば無理矢理にでも欲情し妊娠させられる。

女性に対して何て都合の良い存在だろうか。これからの世界において、女性は少しムラムラしたらその辺にいる男性をこき捨て穴にすれば良い。圧倒的な腕力差に物を言わせて強引に物陰へ連れ込み、有無を言わずビキビキに勃起した肉棒をキツキツの小さな穴にぶち込めば良い。それだけで何でも言うことを聞いていつでもどこでも使える。ぶにあなオナホの出来上がりだ。

だからこそ、大災害は神罰と考えるものがある。

長い間女性を支配してきた男性という邪悪な存在に対する神罰。

これは神の意思であり、男性への強姦行為は神意の代行なのだ。

とどのつまり、レイパーたちの大義名分ということだ。

「んんんっ♥！ んむおおおお♥!!」

「ほらほら、最初の威勢はどうしたの？ ぷっ、またイツてるし！ 大人のクセに恥ずかしくないの〜？」

マウントを取られ最初に強制絶頂をキメさせられてから、すでに一時間近くが経過していた。日も傾き始め、空が茜色に染まり始めている。ただでさえ少ない人通りは更に少なくなり、一度絶頂して脱力した隙に茂みの影へ連れ込まれた兄たちを通りすがりの

第三者が発見する可能性は極めて低い。つまり、兄はこの強姦魔たちが満足するまで翻られ続けるしかない。

この一時間の間、少女たちはひたすら兄の身体にイタズラを続けた。

リーダー格のツリ目の少女は無毛の割れ目に指を添え、時に優しくなでさすり、時にクチュクチュと音を立てて中をかき回す。当然責めは膣内だけではなく、特別敏感な陰核にも行われた。淫らに盛り上がった恥丘を優しく撫でて油断させたところで、コリコリに隆起した淫豆をつまみ潰す。すると度重なる絶頂の疲労でぐったりとしていた幼い身体が、打ち上げられた魚のようにビクビクと跳ねてくぐもった嬌声をあげるのだ。ツリ目の少女は元は大人だという雑魚メスが自分の手で無様な姿を晒すたびに嘲笑し、男のくせに恥ずかしくないのかとなじった。

「ふもっ♥!! ふんううう♥♥!!」

「うわ、こいつおしっこ漏らした。くっさ。いい歳してさあ、お父さんとお母さんが悲しむと思わないわけ？」

落ちて着いた様子の少女は兄の無い胸をくにくいと無遠慮にこね回し、時たま気が向いたように乳首を強くつねり上げる。兄が痛みで感じるマゾガキだということをすで見抜いており、一度キツイ刺激を与えしばらく時間を置き、痛みが治まってきたところを見計らってやっているのだ。最初はただ痛いだけだったはずのそれが、繰り返されるう

ちにあつという間に性感帯として開発されてしまい、終いには深い絶頂を迎えて膀胱が緩むほどになってしまつていた。

「ふっつ♥!!ん、ぎい、い、い、っ♥♥!!」

「ほーら、また角カリカリされちゃうよお。あはは！こいつ泣いてるんだけど！あーやつば男虐めるのが一番楽しいわ」

良く日に焼けた小麦色の肌の少女は、ツリ目の少女のような馬鹿にしたようなものではなく、心底楽しそうに笑い声をあげながら兄の角に爪を立ててガリガリと激しく上下に動かしている。とても本人の言うようなカリカリなどという生易しいものではなく、兄は今にも意識が途切れそうなほど強烈な快楽に襲われ、しかしあと一歩で気を失うという寸前で角を離され、落ち着いてきたらまた同じように責められるという快樂地獄を味わっていた。

「……っ♥……っ♥」

ハイライトの失われた瞳でぐったりとした様子の兄は、もはや全員がかりで押さえつけなくても逃げ出す力など残つてはいない。これまでの経験からそれをよくわかつている三人は、交代交代で好きなように兄を虐めながら残りの二人はその様子を撮影したり兄の私物を漁っていた。

遊んであげたお礼代わりと称して財布から万札を抜き出し、なにか面白いものが入つ

てないかとスマホのロックを解除しようと試みる。その時、偶然にも兄のスマホに着信が入った。コール音がほんの一瞬響いてすぐに途切れる。ロックを解除しようと画面にタップした瞬間、偶然にも着信を取ってしまったのだ。

『お兄ちゃん？ 今どこに居るの？ 遅くなるなら連絡してって言ったよね？ ちよつと、お兄ちゃん？』

少し怒った様子、されど心配心配で仕方がないという感情が隠しきれていない声音がスマホから流れる。一瞬、スマホを操作していたツリ目の少女はマズイと思ったが、すぐに考えを改めてニヤニヤと邪悪な笑みを浮かべた。

「もしもし〜」

『え!? だ、誰ですか？ あれ、番号間違えた……?』

「んーん、間違ってるよ。お兄さんのスマホちよつと借りてるんだ。一緒に遊んでくれてたの」

『ああ、そういう……。おにいちゃ——じゃなくて、兄に代ってもらえますか?』

「はーい♥ ちよつと待ってくだーい♥ カナエ、ストップ。足ほどいて。あとガムテも」

「えー? 今良いところなのに」

「いいから。シズカは録画してて」

「りよーかい」

「んおっ♥」

ツリ目の少女に声をかけられ、兄の胸を弄り回していた少女が少しだけ強めに乳首を指で弾き、腰掛けていた兄の身体の上から渋々身を起す。それからツリ目の少女の指示通り兄の両足を縛っていたなわとびをほどき、ガムテープを優しく剥がした。そして、すでに逃げる力なんてないはずの兄の腕を押さえつけた。

「はあっ………♥ はあっ………♥」

両足と口が解放された兄は虚ろな瞳でツリ目の少女を見るが、何か言葉を発する元気はないようだった。そもそも一時間もの間慣れない快樂責めをされるだけでも辛いというのに、口を塞がれていたことでその苦しさはさらに増していた。今はようやく解放された口を目一杯使って呼吸を整えるのがやっとだったのだ。

和から電話がかかってきていることに気づいていない兄は、酸素不足の朦朧とする頭でようやく少女たちの気が済んだのか安堵していた。今となつては少女たちに虐めは悪いことだと教えたり、更生させようだなんて意気込みはすっかりなくなってしまうていた。大人としての矜持なんてものは、快樂拷問が始まったほんの数分後には失われていた。

それは何も、兄が特別心の弱い人間だというわけではない。TS娘はこと性的な面に

おいて、ふたなりには絶対に勝てないようになっていたのだ。

だから兄の心が折れて、あんなに辛い目にはもうあいたくないという恐怖で支配されてしまうのも仕方のないこと。

「おにいさん♪ 妹さんから電話だよ」

「え……？」

『お兄ちゃん？ おーいお兄ちゃん？』

「の、和あ……♥！ た、たすけ——」

「はいドーン」

なぜ妹からの電話に少女が出ているのか、なぜそれを自分に渡して来るのか、冷静に考えれば不可解で不自然極まりないことのはずだが、快楽で頭をぐちゃぐちゃにかき乱された兄に難しいことはわからなかった。だから言われるがまま素直に電話を受け取って、電話の先にいる妹へ助けを求めようとした。兄に電話を渡せばそうなることは必然で、ではツリ目の少女はそのことを考えつかなかったのか？

答えは否だ。

兄が妹へ助けを求めようとした直後、ツリ目の少女は兄の意識が電話に集中している隙に雄々しく起立した男性器を泡立つほど濡れたぶにぶにの割れ目にあてがい、強引に股を開かせて何の躊躇もなく思いきり最奥までぶち込んだ。



小学生のものとは思えないほど長く太い少女のそれは、大災害前の女兒が相手であればその全てが小さな身体に収まるはずもない。しかし兄のロリボディはしつかり根元までくわえ込み、お腹がポコツと膨らんでいた。

「——おっ♥? いぎいいっ♥♥!? んおっ♥!? おほおっ♥♥!!」

『お兄ちゃん!? 何してるのお兄ちゃん!? お兄ちゃんつてば!?』

「イグツ♥! イグウウツ♥!! とゝめゝてゝえゝ♥! イグゝのゝとゝまゝんゝなゝいゝかゝらゝあゝ♥!!」

何が起きたのか理解できず、一瞬遅れて処女膜を破られたことに気が付いた兄の身体へ、凄まじい激痛とそれを上回るほどの快感が逆る。一時間かけて痛みを気持ちいいと感じられるように開発された兄の肉体にとつて、処女喪失の衝撃は角を強引に擦り上げられることを優に上回るほどのものだった。

妹へ助けを求める声は最後まで続かず、獣のような絶叫と共にビクンビクンと大きく腰が跳ねる。ツリ目の少女の肉棒が挿入されたままの状態でそんなことをすればどうなるかなど明らかで、兄は自らの腰の動きで新品の敏感な膣内を激しく擦り上げられ、それによつて発生した快樂でまた脳みそがショートしそうなほどの絶頂を迎え、無意識の内に腰を激しく動かしてしまう。快樂から逃げようとする動きが新しい快樂を生み出し、無限ループが発生していた。

さきほどまで少女たちから行われていた性的拷問は確かに辛かったが、三人が交代するときに少しの休憩時間があったり、一人一人の責めも緩急のあるものだった。

だが、この腰振りループは最悪だ。強い快楽に深く絶頂すればするほど腰の動きは激しくなり、それによってより強烈な快楽が兄を襲う。

物理的に兄の身体が動かなくなるまで終わることのない地獄の無限腰振り。休憩も緩急もなく無慈悲に膣内をぞりぞり削られ力強く子宮を殴られ続けるのだ。兄が自ら腰を振るたびに、少女のオチンポが幼いお腹をポコポコと殴りあげる。

しかもツリ目の少女は一切自分の腰を振っておらず、ただ兄のキツキツおマンコに挿入しているだけなのだ。これで少女が腰を振り始めればどうなってしまうのか。

だが、今の兄にはそんな恐ろしい二の手が控えていることなど考える余裕がなかった。あまりの気持ちよさに半狂乱で止めてなどと言っているが、そもそも腰を振っているのが自分だとさえ気づいていないのだ。妹からの呼びかけもまるで耳に入っていないようで、雄叫びの如き嬌声と制止の懇願を喉が枯れそうなほどの大ききで繰り返している。

「うっは♥ このオナホヤバすぎ♥ 全自動オナホじゃん♥ 大人だとか言って偉そうにするだけあるわ♥ あ、妹さくん♥ お兄さんの処女マンコゴチです♥ こんな良いオナホが近くにあるのに使っていないとか勿体ないよ〜♥」

『ちよつと！ 今すぐやめなさい！！ 初姉！ 警察呼んで！！ あんた絶対許さないからね！！』

「男をレイプするのは神様の代行だから無罪だよ♡ あ、でも警察呼んだらお兄さんの命は保証しませーん♡ じゃ〜ね〜♡」

『待ちなさい——』

「た、す、け、て、え、♡！ う、い、い、♡！ の、と、か、あ、♡！ の、そ、み、い、♡！ ゆ、ぎ、い、♡！ お、っ、♡！ ま、た、イ、ク、♡！」

へこへこ無様に腰を動かし嬌声を上げることしか出来なくなった兄からスマホを取り上げた少女は、怒り心頭と言った様子の和を煽り倒し、一方的に電話を切った。本当に警察を呼んだのかはわからないが、これほど大声を出せばいくら暗くなり始めていて人通りが少ないと言ってもいずればバレるだろう。どちらにせよ潮時だった。

「じゃあお兄さん、このまま中出しするけど子供は自分で育ててね♡」

「や、た、あ、♡！ も、う、や、た、あ、♡！」

「うるさい！ 良いから黙ってあたしのザーメン飲み込め♡！」

「お、っ、♡！ イ、ク、♡ イ、キ、ま、す、♡！！ イ、ツク、ウ、ウ、♡♡♡！！  
あ♡」

腰を動かす筋肉が完全に疲労しきり、絶頂によるへこへこダンスが緩慢になり始めた

ころを見計らってツリ目の少女は激しく自らの腰を動かし始めた。

さきほどまでの兄の腰振りとは異なり、パンパンと容赦なく肌がぶつかり合う音が響きわたる。それはつまり、少女のセックスの激しさは兄が腰を振っていた時以上のものであることを意味し、疲労困憊で意識を失う寸前だった兄を強引に叩き起こした。

とはいえ少女の方も限界は近かった。なにせ初物極上のキツキツおマンコが相手だ。気を抜けばあつという間に搾り取られかねないほどの締めりと、それでいて凶悪な極太チンポ全体を包み込むようなザラザラとしたヒダが絡みついてくるのだ。

兄が自ら腰を動かしていた時は単にその刺激に耐えるだけで良かったが、自分で腰を動かすとなれば話は別。この心地良いオナホを思う存分堪能し子種をぶちまけたいという本能的な生殖欲求と、まだまだこオナホを楽しんでいたという、虐めたいという嗜虐的な欲求がせめぎ合い、ついにそのバランスが崩れる時が来た。

「もうっ、出る♥！ ああ♥ 人間オナホに精液排泄さいつこう……♥」

「あゝっ、っ♥！ おゝなゝかあゝっ、いゝいゝいゝ♥！ イ、キュ、ウゝ♥！」

どぴゅどぴゅと音が鳴りそうなほど冗談みたいな量のアツアツ精液が兄の膣内に解き放たれ、一瞬気を失っていた兄の意識が膣内射精による絶頂で呼び戻される。折角意識を手放すことで快樂地獄から逃れられたというのに、気が付けばお腹の中を満たす熱で絶頂させられているのだから兄としては溜まったものではない。しかしそれに対す

る文句を言う余裕などあるはずもなく、あついあついと可愛らしい悲鳴をあげて、一時間の開発中に躡けられた絶頂報告を無意識のうちに行っていた。

「ふう〜♥ このオナホマジで当たりだわ♥」

「おっ♥ んおっ♥ ほお……♥」

兄の小さなおマンコから、年齢不相応の凶悪なおチンポが引き抜かれ、その衝撃で兄は軽く絶頂した。引き抜かれたそれは一度射精したとは思えないほどギンギンに猛り狂っており、本人の言葉通りもつともつとセックスしたいという意味を雄弁に物語っている。

少女は勃起状態のそれを自分で軽くしごき残り汁を絞り出し、先ほど兄からはぎ取った下着でぬぐい取って兄の顔面に押し付けぐりぐりと塗りたくった。

「ご主人様の匂いをよく覚えときなさい♥」

「んえ♥ くさっ♥ くさいい♥ んっ♥!」

「ぶっ、お兄さんもしかして今のでイツたの？ マジでチンコイライラさせるなあ♥  
全然ヤリたりないよ♥」

「そんなこと言ったらあたしらは一回も抜けてないんだけど」

「とりあえず今は退散しよ。処理は他のオナホ使えばいいじゃん」

「わかっているって。あたしだって警察に捕まるのは嫌だし。あ、お兄さん、警察にチクつ

たら撮ってたやつネットに流すし、絶対にもっとひどいことしてあげるからそのつもりでね〜」

少女たちは談笑しながら地面に置いていたランドセルを回収し、ヤリ捨てた兄をそのまま放置して公園を去って行った。神様の代行だから無罪などというのはSNSで頭のオカシイ連中が声高に叫んでいるだけで、少女たち自身が本気でそんなことを考えているわけもない。

とは言っても、TSした男性は手籠めにしてやれば何でも言うことを聞くのだから気に入ったらレイプするという思想が行動原理にあることは間違いない、その悪質性は大きくして差があるわけではない。むしろ、警察に捕まらないように子供ながらに知恵を使っている点で言えば、頭のオカシイ性差別者よりも悪質ともいえる。

「うう………♥ ひぐつ………♥ ぐすつ………♥」

少女たちに弄ばれる快樂地獄からようやく解放された兄は起き上がる気力もなく、精液の悪臭に鼻腔を犯されながら、土埃や尿、精液で薄汚れた白いワンピースに身を包んだ自分の身体を掻き抱くように身を縮めて泣き始めた。

辛くて、苦しくて、悲しいのに、身体の中に残る少女の熱が、じくじくと毒のように微弱な快感を与え続けていた。

## 7 いじめ編（無自覚オナホ宣言、チン嗅ぎ）

兄が三人の少女たちにレイプされ心身共にズタボロにされてから、早くも二カ月が経過しようとしていた。

あの日、四姉妹は少女たちの脅しがどこまで本気かわからず、万が一にも兄の命が脅かされるようなことがあってはマズイと思いつく結局警察には連絡せず自力で兄を探すことにした。幸いにも兄のスマホにはGPSが搭載されていて、発見するのはそう難しいことではなかった。

問題は兄を発見した後のことだった。四姉妹がGPSの反応を頼りに公園に駆け付けると、そこには身を汚され縮こまって涙を流す兄の姿があった。四人で選んだ可愛らしいワンピースは破瓜の血や尿の色に染まり、強引にこじ開けられた幼穴からは強姦魔の汚濁がトプトプと流れ落ちる。

和は激怒した。必ずかの邪知暴虐のメスガキたちを殺さねばならぬと決意した。

和のあまりの乱心っぷりに他の姉妹たちは逆に冷静になった。もちろん顔も知れぬメスガキたちへの怒りや憎しみこそあるが、それ以上に傷ついた兄を助けるのが先決だった。

汚れなど関係ないと初は兄の身体を抱え上げ、もう大丈夫ですよ兄さん、よく頑張りましたね、と優しく微笑みかけた。その内心で、頼れる兄が年下の少女に嬲られ弱弱しく涙を流していることに大興奮しているながらも、その片鱗をおくびにも出さず慈愛の女神のように兄を慰めた。

家に帰りつき、お風呂に入つて兄の身を清め、暖かいご飯を食べさせ、添い寝して寝かしたつたところで、四姉妹はようやく今日の出来事について話し合う場を設けられた。

乱暴なメスガキどもにレイプされた兄は帰宅後も映らな瞳のまま放心状態で、一人になることを極端に嫌がった。誰かが一緒になければトイレにすらいけない有様だった。それほどまでに恐ろしい体験だったのだろう。

メスガキたちの報復を恐れたのか、兄は警察には言つちやだめだと身を震わせながらしきりに呟いていた。

四姉妹としては、兄を欲望のままにレイプしてあんな風にしてしまったメスガキに報いを与えなければ気が済まないが、当の被害者がこれ以上ことを荒立てることを望んでいない。であれば、ここでそれでも警察に被害届を出すというのは姉妹のエゴにしかならない。

初と希と幸は、納得しきれていない部分はあれど兄がそういうのならとこれ以上今回



の件に触れるのは止めることを提案した。幸いにも命は助かったのだから、今後はもつと兄の身の安全に気を付けることにしよう。

和だけは最後まで強情で、例えそれで兄に嫌われることになつたとしても犯人を見つけて出してぶち殺すべきだと主張し続けたが、翌朝妹たちを心配させまいと空元気でいつものように振舞う兄を見て考えを改めた。兄が昨日のことを忘れようとしているのだと察したのだ。犬に噛まれたとでも思つて、無理にでもいつもの日常を送つて、なかつたことにしようとしているのだと。

これ以上自分が騒ぎ続けるのは、兄に嫌われるだけではなく兄を傷つけることなのだと悟り、和は警察への通報を諦めた。それはそれとして自力でメスガキどもの痕跡を辿つて報復するつもりではあるようだったが、兄はそのことを知らない。

実を言うと、性暴力の被害にあつたTS娘がこのように泣き寝入りすることはそう珍しいことではない。

兄のように報復を恐れたり弱みを握られたりしている場合もそうだし、女にレイプされたなんてことを警察に伝えるのはプライドが許さないという場合もある。中でも特に多いのは、徹底的に敗北を刻み付けられ服従させられ、絶対に逆らうことが出来ないように躡けられてしまうことだ。最初は嫌々だった性行為もいつしか自分から求めるようになり、心からふたなりに跪く性奴隷になつてしまうTS娘は珍しくない。

理性と常識のある人ほど勘違いしていることだが、現在の人間社会は確かにある程度治安が回復しているが、正常に回っているのはそれだけが理由ではない。レイプされたTS娘が自ら望んで奴隷に成り下がり、そのご主人様と奴隷が何食わぬ顔で社会生活を送っているから、社会は崩壊していかないのだ。

一閑話休題（それはさておき）、いくらいつも通り振舞おうとしたからといって、あんなことがあつた翌日から何事もなかつたようにというのは難しい。

兄の笑顔はぎこちないものだったし、ふと気の抜けた瞬間に身体を無理矢理押さえつけられる感覚がフラッシュバックして震えだしてしまうこともあつた。

いつも学校に行くのが一番遅い希が最後に家を出ようとした時は、思わず一人にしないでと縋り付き結局学校をサボらせてしまった。

授業が始まる時間帯になってから、兄は自分の手で妹をサボらせてしまったことで自己嫌悪を感じたが、同時に自分を膝の上に乗せて一緒にゲームをしてくれる希の存在が頼もしく、恐怖に苛まれていた心が温かさに包まれ癒されるのを実感していた。

それから一か月ほどは、また交代で四姉妹が兄と一緒に留守番をするようになってきた。ただしその目的は今までのように兄が勝手に外出するのを抑止することではなく、物理的かつ心理的に兄を守るためだ。

最初の頃はいつも通りに振舞いながらも言動の節々に不安定さが漏れ出ていた兄

だったが、一か月も経つ頃には心の傷も凡そ塞がり、たかがレイプされただけ、これからは気を付けてれば大丈夫だと思えるようになった。

ネットから得られる情報やテレビのニュースを見る限りでは、外に出て普通に働いているTS娘はごまんといる。身体が小さくなったとは言っても力が弱くなったわけではない。何より働कि手が半減しても正常に回るほど社会というのは甘くない。

平常の世の中で自分一人がTS娘になったのであれば仕事なんて出来ないかもしれないが、世界中の全ての男性が同じ条件なのだから今まで通りに労働を求められることは当たり前といえる。

ニュースだけではなくバラエティ番組などでも普通にTS娘は出演しているし、そもそもあのレイプされた日に兄が町を実際に見て回った際には、普通に一人歩きしているTS娘も多かった。

つまり、一人で外に出たらふたなりにレイプされるなんていうのは例外的な話であり、実際には何も起きないのが普通のことなのだと言は認識した。もちろん油断したり無防備に一人でふらふらしていたら危ないかもしれないが、それは大災害前の女性とて同じこと。たまたま運が悪かったのだと、意識してしっかり身を守ってさえいればあんなことは早々起こらないのだと、自分で自分を励ました。

そうして更に時は流れ、現在。未だに一人で外出することは足が竦んでしまつて出来

ないものの、兄はすっかりいつもの調子を取り戻していた。過度に妹たちにべったりなこともなく、一人でのお留守番もなんなくこなせるようになった。TS娘が相手ならば、今では宅配便だって受け取れるのだ。

『すいませーん！ シロイヌフソウでーす！』

噂をすれば影というやつで、兄が自室でくつろぎながら漫画を読んでいると家のチャイムが鳴り響き、外からそんな声が聞こえて来た。

兄が一応警戒してインターホンのカメラで相手を確認すると、ピンク色の長いくるる髪に美しい青眼の少女が小さな荷物を持って立っていた。シロイヌフソウの制服は来ていないが、TS娘の配達員の場合は珍しいことではない。幼女向けの制服の支給が間に合っていないらしく、何度か兄が荷物を受け取った時も配達員は私服だった。

知らない顔の配達員だったが、その髪色や瞳の色を見ればTS娘だということはわかる。相手がふたなりだったならば一人で留守番している時に扉を開けてはいけないことくらい兄も理解しているが、TS娘ならば警戒する必要もない。

兄はインターホン越しにハイ！ と元気に挨拶を返し、とてとととと急ぎ足で玄関へたどり着き、何の危機感もなく扉を開けた。

「やつほく、お兄さん久しぶり♪ あたしのこと覚えてる？」

目に映った信じられない、否、信じたくない者の姿に咄嗟に扉を閉めようとした。だ

が、それよりも早く強引に扉が開け放たれ、身体を持っていかれそうになつて手を離した兄の視界に、あの、兄を無理矢理押さえつけ、嫌だと言つても聞いてくれず、滅茶苦茶に身体を弄り回した三人の少女が映つた。

「あ……、ああ……」

「結構いいところに住んでるね」

「思つたより元氣そうじゃん！ 長く遊べそうだね」

忘れていた、忘れようとしていたあの日の記憶と感覚が蘇り、兄は顔を蒼白にしなからうめき声をあげて後ずさり、タタキと廊下の段差にかかとをひっかけて尻もちをついた。

そんな兄に構うことなく、落ち着いた様子の少女、カナエと、小麦肌の少女、シズカが了解を得ることもせずに家の敷居をまたぐ。

「な、なんで……、どうして……」

「あはは、お兄さんビビり過ぎる。なんでって、家の場所がなんでわかつたかつてこと？ お兄さん頭悪いね。ほら、これだよ」

恐怖で歯をカチカチと鳴らしながら主語の抜けた問いを投げかける兄に対して、ツリ目の少女は嘲笑をあげながら自身のスマホを突き付けた。そこには大災害前に兄が取得していた免許証の画像が写し出されていた。

「お兄さんみたいな上物のオナホ、簡単に手放すわけないじゃん」

「あたしはまだ使っていないし」

「今日のために三日もオナ禁してきたんだから覚悟しろよ〜♥」

あの日三人の少女たちがあつさりとい兄を開放したのは、ツリ目の少女しか射精していないにもかかわらず多少の文句を言うだけで逃げるように去って行ったのは、兄の私物を漁った際に免許証を見つけ、そにお住所を知ることが出来たからだだった。

もしも兄の所在を確認していなければ、あの誤タップで電話が繋がってしまった時に妹と会話させることなどなかったし、そもそもあんなに簡単に解放することもなかった。

兄にしてみれば散々虐め倒され処女膜まで破かれたあげくその場に放置されるといふのは、殺される一步手前の極悪非道な行為だと思っていたが、少女たちにとってはあるものは唾を付けた程度の認識でしかなかった。最初から、兄を壊れるまで犯し抜き一生逃れられない奴隷にするつもりだったのだから当然といえば当然だ。

「せーんーせー、なにぼさつとしてんの？ 早く入れよ」

「は、はい……」

兄が恐怖に身を竦めて固まっている間に、ツリ目の少女は背後に視線を向けてピンク髪の子に声を低くして命令した。すると、顔を青くしたTS娘は声を震わせながら

返事をしてツリ目の少女に続いて玄関の扉をくぐる。

「ごめんなさい……、ごめんなさい……！」

ピンク髪のTS娘が俯いて目に涙を浮かべながら謝罪を繰り返す。それが玄関の扉を閉めて鍵をかけたツリ目の少女に対するものなのか、ずかずかと上がり込んで無遠慮に兄の身体をまさぐり始めたカナエとシズカに向けてのものなのか、あるいはいやだいやだと暴れようとしている兄に向けてのものなのか、それは本人にもわからない。

「やめろ！ やめろよお！ 俺は男だぞ！」

「なんで急にチンコ煽り始めた？ 早く犯して欲しいの？」

「知らないんですよ。それがセックスパールだつて」

頭では敵わないと知りつつも、もうあんな酷いことはされたくないという恐怖が身体を突き動かし、兄は腰が抜けたままの状態で手足を振り回し抵抗しようとした。しかしただでさえ同程度の腕力の相手が二人がかりという不利な状況であり、加えて身体を満身に動かせないのだから、結果はわかりきっていた。兄はあつという間に両手両足を押さえつけられて身動きが取れなくなってしまった。

それでもなお、自分を奮い立たせる意味で虚勢を張るが、それすら少女たちに嘲笑われていけないしの戦意を委縮させられる。

TS娘をレイプするようなふたなりたちにとって、俺は男だぞなんて言うのは、私

はふたなり様に絶対敵わらない性奴隷種族です、まだ自分が強いと思つて勘違いしてるのでたっぷり躑居けて奴隷だと気づかせて下さい、という宣言でしかない。

あるいは、私はいつでもどこでもこき捨てOKのぷにぷにオナホールなのでご自由にお使いください、生意気言つてオチンポ様を元気にしてるだけなので今すぐ全力で奥までぶち込んで黙らせてください、と言つたところだろうか。

実際、ふたなりに堕とされたTS娘はキツイお仕置きして欲しい時にわざと俺は男だ♥なんて言つたりすることもある。TS娘は基本的にマゾなのだ。

まだ堕とされていない男性たちからしてみれば男をレイプしようなんておかしいという意味で言っているのだろうが、ふたなりにとつては早く犯して下さい、虐めて下さい、わからせて下さいと言つてるようにしか聞こえない。

「先生は録画しててね」

そんな兄の目の前にツリ目の少女が蹲踞の体勢で座り込み、自身のまたぐらを兄の鼻に押し付けながら下着をずらし大きく隆起した肉棒を露出させた。

何か運動でもしてきたのか、あるいはそれを洗っていないのか、開け放たれた下着の中からは蒸れ蒸れのすえた空気が流れだし兄の鼻腔を犯す。さらに少女は、カリ裏にこびりついた黄ばんだ白いカスを兄の顔面に擦りつけるように腰を動かして、ツンと鼻にくく匂いを染み込ませていく。



「おえっ ♥ んおっ ♥ くっさっ ♥! くさすぎっ ♥ うおえ ♥ やめてえ ♥  
 ♥ おほっ ♥! んもお ♥! んむっ ♥ んむうう ♥!」

「ぶっ、チンポ臭だけでアクメするとかほんとオナホの才能ありすぎでしょ ♥ 偉い  
 ねー ♥ ちゃんとご主人様の匂い覚えてたんだねー ♥」

「うっわ、えぐいくらい腰へこへこしてんだけど」

「プシュプシュ潮吹いてっし。もう押さえる必要ないわ」

汚チンポの強烈な悪臭で簡単に発情してしまった兄は、咄嗟に口呼吸に切り替えてそれ以上自分をおかしくしてしまう臭いを遮断しようとする。いつ洗ったのかもわからないチンポの臭いだけで絶頂してしまうなんてそんなの変態だという嫌悪感と、これ以上この匂いを嗅いでいたら絶頂してしまうという恐怖、矛盾する二つの感情が一瞬のうちにせめぎ合い現実から逃れようとしたのだ。

しかしツリ目の少女は目ざとく兄の呼吸が変わったことに気が付き、その口を手のひらで覆い隠し、少し態勢を変えて鼻の下、鼻柱や鼻翼でカスを削ぎ落すように腰を振った。そうなるまえはどれだけ嫌でもその悪臭と共に鼻から空気を吸わざるをえず、濃厚な精液を直接鼻に流し込まれているような悪寒に鳥肌を立てながら、兄はどうとう絶頂してしまった。

「おほおっ ♥! イク ♥! イギますっ ♥!!」

「んふ♥ まずは一発目、射精る♥！」

兄の絶頂に合わせるように、ツリ目の少女が粘つく濃厚でくさい精液をドブドブと放出し可愛らしい顔面にぶちまけた。発射の直前に口を押えていた手をどかしたことで、兄は顔にぶちまけられるだけではなく口の中にも白濁液が入ってしまったが、チンポ臭絶頂に忙しくそんなことを気にしている余裕もない。

「あひ……♥ はへえ……♥」

一度絶頂した疲労によって呼吸は荒くなり、顔面にくっつき黄ばんだ精液ぶっかけられたことも相まって、吸い込まれる汚臭はどんどんその量を増やし兄の脳味噌を犯していく。カクカク、プシユプシユとおもちやのように何度も何度も腰が跳ねて潮がまき散らされ、絶頂が収まる頃にはだらしなく舌を出しトロンとした瞳でビクビクと痙攣する一匹のメス豚が出来上がっていた。

## 8 いじめ編（全裸土下座、精飲）

すえた汚臭をたつぷりとかがされ何度も絶頂に達した兄は、快樂の余韻が収まる暇もなく衣服を全て剥ぎ取られ、強制的に態勢を変えさせられ、廊下にぶちまけられた粘度の高い白濁液に口づけするように土下座をさせられていた。

恐ろしいほどの快感に手足は痺れて力が入らず、目の前の黄ばんだ精液から漂う臭いが先ほどの連続絶頂を想起させ思考力を徐々に奪っていく。

「ほらお兄さん♥ 汚したところちゃんと掃除しなきゃ♥」

「じゆるじゆるって下品な音立てて吸ってね」

「エッチな身体であたしたちを誘惑したこと謝りながらね〜」

「だ、誰が……、そんなことやるか……♥」

土下座してる兄の上にツリ目の少女が腰かけ、頭を足蹴にして精液だまりへ顔面を押し付けようとし、カナエとシズカは兄の前に立つてそれぞれ最低な要求をしながら兄を見下ろしていた。

絶頂の影響でただでさえまともに身体を動かせず、そのうえで体重をかけて押さえつけられている兄はその体勢から脱出することは出来なかったが、何でもかんでもお前た

ちの思い通りにはならないという強い反抗心を持って、必死に頭を上げようとツリ目の少女の脚力に対抗する。

「っひ♥」

ツリ目の少女からすれば、今はまだ兄の頭を軽く足置き程度に使っているに過ぎず、本気で頭を押さえつけようと思えば1秒もかからずに自らの精液を啜らせることが出来た。実際、チンコを苛つかせる程度の意味しかない兄の生意気で可愛らしい反抗に一瞬足に力を込めてしまい兄から甘い悲鳴が漏れたが、何とか自分を律して足に込めた力を抜いた。

以前兄の身体で遊んだときは自分だけが膣内を楽しんでしまったし、今回も味見程度ではあるが自分が一番最初に手を出した。これ以上自分ばかりが好き勝手にするとカナエとシズカが不満を持つだろうと判断してのことだった。

二人はそんなツリ目の少女の様子から意図を正確に読み取り、カナエは小さく微笑みシズカはニヤニヤと笑い出した。

「ふーん、（こ）までされて堕ちないなんて男のくせに根性がある」

「困ったね……。完璧に堕とさないとあたしたち捕まっちゃうかも……」

目に染みるほどの悪臭を放つ精液だまりと睨めっこさせられている兄には、二人がどんな顔でそんな話をしているのかは見えなかったが、その話の内容を理解し一縷の希望

を抱いた。

「お、俺は何をされたって墮ち？たりしない……♥！ 今ならまだ許してあげるから、もうやめなさい！」

あまりインターネットの文化に詳しくない兄は、少女たちの口にする墮ちるという言葉の意味が正確にはわからなかったが、諦めるというような意味合いの言葉だと考え、強気な態度を取って見せる。

それで諦めて帰ってくれるのであれば、本当に許してあげようと思っていた。少なくとも兄本人はそう思っていた。実際には、無意識的にすでに少女たちを自分よりも強い個体だと認め半ば服従しかけており、これ以上この少女たちに関われば取り返しのつかないことになるという恐れを抱いていたからなのだが。

「うーん、でもこのまま帰るのも癪」

「そうだ、じゃあ一つゲームをしようよ」  
「ゲーム？」

「そうっ、今からお兄さんには土下座のままそれを掃除して貰いながら、あたしたちを誘惑したことを謝ってもらいます！ そのごめんなさいであたしたちの気が済んだらお兄さんの勝ち！ もう終わりにしてあげる」

カナエとシズカが小芝居を終えて兄に結論を告げる。

言い方を変えているだけで、結局のところその要求は何一つ変わっていないかった。

「っ♥ ふざけるな♥！ そんなこと出来るわけないだろ♥！」

こんな姿になってはいるが、兄とて頭の中身まで子供になったわけではない。二人の言葉を真に受けてそんなことを出来るはずもない。約束が守られる証拠はないし、何より自分から精液を啜るなんて考えたくもなかった。

先ほどはツリ目の少女の足に抵抗するのに精いっぱいよく考えていなかったが、改めて説明されたことで、目の前の濃厚でプリプリのくっつき精液を啜り、くちゅくちゅと咀嚼し、何も悪くないのに自分のことを貶めながら謝罪させられる姿を想像して、ごくりと喉を鳴らし顔を赤くしながら息を荒げて大声で拒絶した。

「へえー、じゃあこの前みたいにお兄さんが泣いちやうくらい滅茶苦茶にするしかないなあ。別に時間はいくらでもあるし、お兄さんが落ちなくても途中で帰れば良いし」

「そうしよ、回りくどいのは嫌い。あたしたちは約束は守るけど、お兄さんは虐められたみたいだし。前よりもっとひどいことしてあげる」

「こ、この前、みたいに……♥ もっと、ひどいこと……♥？」

二人の楽しそうに弾んだ声と言葉から、兄の頭にあの日の記憶が鮮明によみがえる。

無理矢理押さえつけられて、どれだけ暴れても逃げられず、助けを呼びたくても、許しをこいたくても喋ることも出来ず、泣きながら与えられる快樂に悶え続けた。もうや

めてくれと、ごめんなさいと叫んでもくぐもった声上がるだけで、そんな反応を見せる度に少女たちは楽しそうに笑うのだ。そうして責めは更に激しくなり、苦しくて気持ちの良い、永遠に続くと思えるほどの快樂地獄に叩きと落とされた。

もう二度とあんな目に遭いたくないと思っていたのに、それよりもひどいことをされてしまう。

「ま、待って♥ わかった、わかったから♥」

兄の身体がぶるぶると小刻みに震えだし、恐怖にひきつった、それでいてどこか期待しているかのような甘さを含んだ声で少女たちに制止をかけた。

「わかったから、じゃないよね？ あたしたちはどっちでも良いって言ってるんだけど」「ゲームをしたいならお願いの仕方があると思うなく」

「くっつ♥ お、お願いします♥ 俺とゲームで勝負してください♥!」

それで本当に解放されるのか、少女たちに本気で帰るつもりがあるのかなど兄にはわからなかったが、それでもあの快樂地獄をもう一度味わうくらいならと、藁にも縋る思いで勝負を受けた。

兄の言葉を受けて、それまでずっと黙って兄の上に腰掛けていた少女が立ち上がる。ここからは全て兄の意思によって行われるものだということを証明するためだ。力づくで無理矢理精液に口づけをするのではなく、自ら望んでの行為なのだ。

「お兄さんそんなにあたしのこと好きなの♥ 精子の一匹も逃したくないみたいなの？  
キモすぎ〜♥」

「今回はそれで良いけど全然お願いの仕方がなっていない。謝る時はもつと下品にするこ  
と」

「あんまり適当だとゲームはあたしたちの勝ちだからね〜」

「わ、わかりました……♥」

少女たちから浴びせられる罵声や嘲笑に兄の声が屈辱で震えるが、抵抗しても勝てないことは先日の一件でわかりきっている。今はただ大人しく言うことに従って少女たちが満足するのを待つしかない。

兄は何度も自分に大丈夫だと言い聞かせた。

本当は嫌に決まっているが、それでもあの日されたことに比べれば我慢できる。

そして、初や和たちが帰ってくるまで何とか時間を稼ぐのだと。

覚悟を決めた兄が、囁し立て急かす少女たちの声を聴き流しながら恐る恐る白い水たまりへ顔を近づけていく。

じゅるっ♥♥ じゅずずっ♥♥♥ ぴちやつ♥ れろえろ♥♥

「ん……♥ うっ♥♥ んむ♥♥ んくっ♥♥」

「そんなゆつくりじゃ全然終わんないよー♥」



「もつと勢いよく吸って」

「何無視してんの♥ 謝れって言ったよね♥」

まだらにぶちまけられた白濁液を、薄い部分は下品な音を響かせながら吸い込み、濃い部分は官能的な水音を立て舌で掬い上げるように掃除していく。

一口目の吸い上げで淫臭を大量に吸い込んだ兄は、強烈なチンポ臭で連続絶頂させられたことも相まって下腹部が熱くうずきだしていた。たった数分の行為によって汚臭で簡単に発情する身体にさせられてしまったのだ。

兄はその事実から目を逸らすようにうずきを無視して二口、三口とダマのような濃い精液を口に含み、独特の苦みとえぐ味に吐き気を催しながら、精液を味わう度に下腹部の熱が全身に広がっていくのを感じた。

その感覚は、つい先ほどカスのこびりついた陰茎をこすりつけられ、子宮に響く雄の臭いで絶頂させられた時のものに酷似していた。

じゅぞぞぞぞつっ♥♥♥!! じゅるっつ♥!! ずぞぞぞつっ♥♥!! じゅるるるるるっ♥♥♥♥♥!!

「ごめっ♥ なさいい♥ いっ♥ ごめん、なさいっ♥ イっ♥ はあー♥ はあー♥ ……げええええっ♥ イグうううっ♥♥!」

「何言ってるかわからないんですけどお♥ っていうかもしかして今、ゲツプの精臭で

「いったの？ ヤバ♥ マジで変態じゃん♥」

「大人のクセに謝ることも出来ないの？」

「はあ、頭悪すぎでちよつとイライラしてきた。下品に謝れって言うてるんだけど」

このまま時間をかけてやっていると終わる前に確実にイク。熱に浮かされた頭でそのことに思い至った兄が、短絡的な考えで一気にゲームを終わらせようとし勢いよく黄ばんだ白濁液を吸い上げる。そして口いっぱい濃密な精液が広がった時、気が付けば兄は浅く絶頂していた。ちまちま精液を吸っているだけでもイキそうな雑魚マゾのクセに、それを一気に口にすればどうなってしまうのかなど簡単にわかりそうなものだが、発情した状態の頭ではそこまで思い至らなかつた。ただただ、早く終わらせなければという焦りだけがあつた。

一度絶頂してしまつてからはひどいもので、精液に口を付けるたび幼穴がヒクヒクと快感を期待するように動き、じゅぞつと下品極まりない音を立て吸りながら浅い絶頂を引き起こす。すると頭の中は一瞬真っ白に途切れ、なぜ自分がこんなことをしているのかすらわからなくなる。ただ、何もわからなくなつた頭で、その苦しくならない程度の丁度いい快楽を求めてまた自ら精液に口を付け、同じことを繰り返すのだ。しかも時折おくびを混ぜては、そのザーメン臭だけでも絶頂してしまう始末。

もはやシズカ要求など耳に入っていなかつた。かろうじて、謝らなければならぬ

ということだけは覚えていた兄は壊れたラジオのように時折絶頂報告を挟みながら「めんなさい」と謝罪するが、それを何のために言っているのかもわかっていない。

「聞き分けの悪い馬鹿にはお仕置きが必要だね」

「ゴえなあい♥」

いつまで経つても淫語を交えた謝罪を始めない兄に業を煮やしたシズカが、精液だまりに顔をつ突っ込んで浅イキしながら「めんなさい」と呟く兄の後頭部を軽く踏みつけた。床に押し付けられて上手く発音できなくなった兄がそれでも無意識のうちに謝るが、シズカはそんな兄の言葉を無視して踏みつけた頭の前の方に体重をかけていく。すると徐々に顔全体ではなく額への圧力が増していき、兄の角が精液にまみれた床へ強く押し付けられた。

「ぎいあつ♥♥!! やべでっ♥♥!! イギユツツ♥♥!! おぎよっ♥♥!!」

シズカが兄の頭をぐりぐりと強く踏みつける度に惨めな声を上げながら腰が跳ねる。さきほどまでのぬるま湯のような甘つちよろい絶頂ではなく、角への刺激による強烈な快感を叩きこまれたことで兄の意識は僅かに覚醒し、雄叫びのような喘ぎ声をあげながらシズカに制止の声をかける。

同時にシズカの足を掴んで何とか自分の頭の上からどこかそうと力を込め、土下座の体勢を崩して跳ねるように暴れるが、それでもシズカの足はその場から動かない。

「ゲームはおしまい。あたしたちの勝ち」

「んぎいいい ♥♥! やだああっ ♥! ながやめでええ ♥♥! んおっ ♥♥!!」

いつの間にか兄の背後に回り込んでいたカナエがのたうち回る兄の身体をpushさえて強引に股を開かせ、懇願を無視してビチャビチャに濡れそぼった小さな穴に自らの男根をぶち込んだ。たった一度ツリ目の少女に貫かれただけのぷにぷにおまんこはキツクカナエのそれを締め付け、亀頭の先で子宮口にキスしてやるとつよつよふたなり遣伝子頂戴♥♥とでも言いたげにキュウキュウと吸い付いた。

「くっ ♥♥ 想像以上……♥♥!」

「おっほおっ ♥♥! なんてえ ♥♥! 言われだどおりにじだのにいい ♥♥!!」

「ジタバタして土下座やめちやったからね。ゲームはあたしたちの勝ちってことで、あたしもそろそろ……♥♥」

「いぎやあああ ♥♥!?! おごお ♥♥!?! ごええつつ ♥♥!」

カナエが兄のマゾロリマンコの具合の良さに顔をとろけさせながらパンパンと力強く腰を打ち付け、それを見て我慢できなくなったシズカが兄の頭から足をどかし、両角を強く握って無理矢理顔の位置を自身の腰まで持ち上げ、ギンギンに勃起したチンコを口マンコに突っ込んだ。

二人の遠慮のかけらもない腰振りに兄は痛みと苦しさを感じながらも、それを上回る

快樂が全身を毒のように蝕み、もはや暴れて抵抗する体力も、噛み千切る様な勇氣も残されていなかった。

「この角イラマに丁度いいハンドルだね♡ チンコ見ただけでよだれ止まらなくてやるからな♡ オラ♡！ 全部飲み込め♡！」

「このクソガキ♡ 生意気に搾り取ろうとして♡ 何が俺は男だ♡ 俺はオナホだの間違いでしょ♡ あたしの子孕め♡ ロリマゾオナホ♡」

「ん♡おおっ♡!! んぶおっ♡！ うゝおえっ♡♡！」

「あくあ、こゝうなちやつたらもうしばらく止まんないなあ♡ 先生を使いたいところだけど……」

「ひっ……♡」

虚ろな瞳で脱力した様子の兄に向って好き勝手言いながら精液をぶちまけ、前後を交代して再び犯し始めた二人を見て、ツリ目の少女は小さくため息をつきながらピンク髪 of TS娘へ視線を向ける。

先生と呼ばれたそのTS娘は、名前の通りツリ目の少女たちが通う学校の教師、それも担任の先生だ。二カ月前に兄をレイプしたことで、元大人のTS娘も思ってたより大したことがないと気が付いた少女たちは、まずは身近で行動パターンを把握しやすい担任の先生をレイプすることに決めた。

手順はいつも通り、TS娘が一人になったタイミングを狙ってレイプし、奴隷になるまで犯しつくすか、時間がないときは弱みを握って脅迫する。

先生の場合はあらかじめ行動パターンや一人暮らしの住居を把握できていたため、何の問題もなくハメたおすことが出来た。調教を始めておよそ一月ほどが経っており、少女たちへの恐怖をその心身に刻み付けられ、何でも言うことを聞く奴隷となっている。今現在も、最初に言いつけられた通りレイプされる兄の痴態をスマホで録画し続けている。

「ね、先生♥ 録画しながらでいいから手で抜いてよ♥」

「は、はい。わかりました……」

普段の少女であればこのまま先生のオマンコも耕して、上手に録画できなかつたことを理由にお仕置きレイプをするところなのだが、今日に限ってはそういうわけにも行かなかつた。今日、この場所には先生の車で来ている。ただ単に帰るだけなら最悪先生が使い物にならなくなっても問題はないが、本来の目的を達成するためには運転手が必要だった。

「あー、そこ♥ 先生もうまくなつたね♥ 最初はあんなに嫌がつてたのに♥」

幼女のぷにぷにおおててによる手淫に射精感を高められつつ、自分たちで仕込んだ性技が上達していることに満足感を覚えながら、少女はどのタイミングで自分も混ざろうか

と兄たちの交わりを眺める。先ほどシズカが言っていたように時間はいくくらでもあるのだ。そう焦る必要はないかな、と。

## 9 いじめ編 (ラブラブえっち)

学校も終わり自宅へと帰ってきた和が、玄関の扉を開いて最初に感じたのは鼻にツンとくるような不快感だった。

大災害以来当たり前のように自身のまたぐらにぶら下がるそれを、和はしごいたことがないが後処理の甘い希のせいで知っている。それが放置された精液の臭いだと。

とはいえ、いくらずぼらな希でも家中にその臭いが立ち込めるほど無節操なことはない。だから和は完全に玄関を開けるその時まで気が付かなかった。廊下にぶちまけられた汚らしい白濁液の存在に。

和はそれが視界に入った瞬間あまりの不快さに鳥肌が立ったが、即座にそんなことを言っている場合ではないと気が付いた。

「お兄ちゃん!?! いないの!?! お兄ちゃん!?!」

四姉妹の中にこんな非常識なことをする者はいない。仮に何らかの事情があつて廊下にぶちまけてしまったとしても、その後処理をせずに他の姉妹に見つかるなんて、そんなことはありえない。

だから和が真っ先に疑ったのは外部の犯行だった。兄が一人で留守番している家に



押し入って、レイプしたのではないかという最悪の想像。どうか無事でいて欲しいと願いながら、白濁液に塗れた兄が泣いている姿を幻視する。それは二カ月前に見た光景だった。あんな弱弱しい、あまりにも悲惨な兄の姿はもう見たくなかった。

和は自分への怒りと絶望に胸を押し潰されそうになりながら家中を探し回った。しかし和の予想に反して、兄は見つからなかった。

あの事件以来兄は一人で外出するようなことはなかったが、もしかしたらどこかに出かけているのかもしれない。もしかしたら他の姉妹が先に帰って来ていて兄と出かけたのかもしれない。もしかしたら兄は今も家の中のどこかに隠れているかもしれない。様々なもしが和の脳内を駆け巡る。

そしてその中には、最悪よりも更に悪いもしがあつた。

もしかしたお兄ちゃんは、誘拐されたのかもしれない。

「初姉!? お兄ちゃん知らない!?!」

和は姉妹全員に電話しバイトも遊びも部活も全部切り上げさせて帰宅させた。

廊下にぶちまけられていた精液や、兄の部屋に飛び散った精液、浴室の排水溝につまった精液、家中のいたるところに散見されるそれを和は証拠として片づけず、それらを実際に見せた上で話し合った。

そうして当然だが、警察へ通報することとなった。ここまできては大事にしたいくない

だとか、復讐が怖いだなんて言っていていられない。そもそもそう言っていた兄がいなくなってしまうのだ。何としてでも見つけ出さなければいけなかった。

兄は行方不明として捜索されると共に、事件性があるとみなされ捜査がされることとなった。

和たちは警察が動いてくれたことに安堵し、これで必ず見つかるとお互いを勇気づけた。もちろん警察任せにするのではなく、自分たちも積極的に兄の行方を捜した。だが、結果は芳しいものとは言えなかった。

当初はすぐに見つかるはずだという希望的観測、というよりは願望を持って精力的に活動していた和たちだが、一か月の間なんの手がかりも得られずにただ時間だけが過ぎていき、その精神は日に日に摩耗していった。

「もしかして兄さんはもう……」

「っ！ 何言ってるの初姉！ そんなわけない！」

「……でも、見つからないのは事実」

「だから何だったのよ！ まさか諦めるなんて言うんじゃないでしょうね！」

「そうは言っていない。……でも、覚悟はしておいた方が良く」

「希は平気なの!!? お兄ちゃんが……! どんな酷い目にあってるのかもわからないのにー」

「そんなわけない……!」

「喧嘩はやめましょう。兄さんが悲しみます」

「フン、その馬鹿兄貴がいらないからこんなことになってんじゃない。誘拐なんかされてんじゃないわよ……、ばか……」

元々姉妹全員が仲良しこよしというわけでもなかったが、余裕がなくなるにつれて仲の良かった姉妹の間にまでギスギスとした空気が流れるようになり始めていた。

とくに兄のことになると熱くなりやすい和と、普段から何か刺々しい幸は他の姉妹とぶつかることが多くなった。

そんなある日のこと、和が兄の写真と探していますという文章を載せたビラ配りから帰ってくる、郵便受けの中に小さな封筒が入っていた。封筒には差出人も宛先も書かれていなかったが、よく見慣れた名前だけが書かれていた。それは兄の名前だった。

和はそこに書かれている文字を見て目を見開き、大急ぎで家に入ってハサミを使い慎重に封筒を開く。兄の手がかりとなるかもしれない中身を、万が一にも傷つけないように。そうして取り出した中身は手紙や文書ではなく、透明な小さいケースに収められたマイクロSDだった。

何かウイルスが入っているかもしれないだとか、そういう心配を全てすつ飛ばして和はそのマイクロSDを自分のスマホに差し込み中身を確認する。

画像や音楽、文書ファイルの件数は0。ただし、動画ファイルが一つだけ収められていた。そのタイトルは「妹さんたちへ」。

嫌な予感を感じながらも、和は震える指でその動画ファイルをタップし再生を開始した。

20XX年×月○日。動画の冒頭に黒い背景に白い文字でそれだけが写し出され、場面が切り替わる。それは撮影された日を示しているようで、その日付は兄がいなくなつてから丁度一か月が経った日だった。

大きなベッドの上で、長い緑色の髪の少女が自らM字に股を開き、片手で自分の陰核をくりくり優しくこね回し、もう片方の手で桃色の可愛らしい乳首をカリカリといじっている。

「んっ♥ はぁ♥ はやくっ♥♥ はやくご主人様のオチンポください♥♥」

「もうっ、お兄さんは相変わらずこらえ性がないなあ。ほら、妹さんたちに挨拶して」

「そんなのどうでも良いからぁ♥！ズボズボ♥！おまんこズボズボしてよお♥！」

「っのメスガキ♥ チンコイラつかせやがって♥ でもダメ♥ そんな風に煽つても

今日は駄目だよ。教えた通りにして♥」

「はーい……♥」

画面の外から聞こえてくる年若い少女の声に緑髪の少女が頬を上気させ息を荒げながら渋々と言った様子で頷いた。

「えっと♥ 初♥ 和♥ 希♥ 幸♥ 元気にしてるか♥？ いきなりいなくなっちゃってごめん♥ でもしよすがなかったんだよ♥ ご主人様たちにレイプされて誘拐されちゃったんだから♥」

画面に映る緑髪の少女は、初達の兄だった。

兄はカメラ目線で妹たちへ語り掛けながらも、恥部を弄る手を止めようとしなない。

「最初は抵抗したんだけどな♥ 当たり前だけど勝てるわけなくて♥ 何度も何度も無理矢理されちゃってな♥ それで、なんか全部どうでもよくなっちゃったんだ♥ だつてエッチするの凄く気持ち良いし……♥ ご主人様たちは俺のこといっぱい気持ちよくしてくれるんだ♥ 毎日頭が飛んじやうくらい気持ちよくて♥ それでな♥ つん……♥」

兄の言葉が一瞬途切れ、ビクビクと身体が小刻みに震えだす。

「ごめん♥ 思い出したらちよつとイっちゃった……♥ とにかく俺は幸せだから♥ 気にしないで好きに生きてくれ♥ 探さなくていいから♥ おれ、ご主人様のお嫁さん

になるから♥♥」

「はあ? 何勝手なこと言ってるの? お兄さんはお嫁さんじゃなくてオナホだって

言ったでしょ♥! このメスガキ♥♥! 人を煽るのも大概にしるよ♥♥!」

「ひっ♥♥ だって♥ 待ちきれなくて♥♥」

「ふー♥♥ ふー♥♥ もう許してって言っても止まらねえからな♥♥!」

顔を隠したふたなりの少女が全裸で画面外から現れ、勇み足でベッドに上る。

そんな少女を迎えるように、淫豆を弄り回していた指で未だぴったり閉じたままの綺麗な幼おまんこを自らくぱあと開く。自身の愛撫と思いつ出しアクメにより幼い秘裂は十分に濡れており、糸を引いて桃色の美しい膣内を露出させた。

「来て♥♥ 来てえ♥♥」

「入れて下さいだろぅがマゾガキ♥♥! 虐められたいからって言いつけ破ってるじゃ

ねえ♥♥!」

「お♥♥! イク♥♥! ごめんなさい♥♥! ふぎよっ♥♥ んほおっ♥♥! 生意

気なマゾガキでごめんなさい♥♥!」

兄は媚びるような甘い声をふたなりの少女へかけ、我慢の限界を迎えた少女が天を突くように大きく怒張した男性器を兄のキツキツの膣内へと突き入れ、兄の小さく華奢な身体を叩き潰すかのように激しく腰を振り始めた。

「謝つたつて許さねえつて言つただろうが♥ 徹底的に躑けなおしてやるから覚悟しろよ♥」

「やああつ♥！ こわい♥！ こわい♥！ こわい♥！ イグツ♥！ またイグツ♥♥！ イキすぎてこわい♥！ ちゅーしてえ♥！ ご主人様あ♥♥！ ちゅー♥！」

「お兄さんすつかり甘えんぼになつちやつたねえ♥ 最初の威勢はどこに行つちやつたの♥？」

少女は兄のことを小馬鹿にするよう笑みを浮かべながらも、一度腰を止めて顔を覆い隠す面を少しだけ上げ、求めに応じ兄の唇に自身の唇を重ねた。自分から舌を侵入させようとしてくる積極的な兄に応えるように、チュリユチュリユペロペロとお互いの舌を絡ませ卑猥な水音をたてる。

さらに兄の両手を恋人つなぎのように握つてベッドに押し付け、まるで恋人のような体勢で腰振りを再開した。

「おひつ♥！ んおおつ♥！ だつてえ♥！ 勝てるわけないもん♥♥！ イグツ♥♥！ こんなに強くて遅しいんだもん♥！ イギますつ♥！ 反抗してた俺がバカでしたあ♥！ はぎゅううつ♥♥！」

「このつ、急に締め付けやがつて♥！ お兄さん、どこに出して欲しい♥？」

「なかあ♥！ 全部膣内に出してえ♥！ あちゅあちゅザーメンで種付けアクメさせて

下さいい♡♡!」

「くらえマゾガキ♡! あたしの子供孕め♡! そしたら生まれる直前に解放してあげる♡ 射精る♡!」

「イグうツツ♡♡♡!! おなかあちゆい♡♡♡! ザーメンやけどでイキまゝすうゝゝ♡♡!! ほへ……♡ あひい……♡ んほおつ♡♡! 捨てないでくださいい……♡」

種付けプレスの体勢で膣内の奥深く、子宮口にキスするだけではなく、強いふたなりの子種を求めて降りてきていた子宮を突き上げ、長く太いチンポを根元まで挿入した状態で少女は小便を放出するようにドピュドピュと吐精した。

射精の勢いが完全に衰えたところで残心のごとくぐりぐりと腰を動かし亀頭の先で子宮口をこね回すと、兄が玩具のスイッチを入れたようにびくりと跳ねて間抜けな声をあげる。

「冗談だよお兄さん♡ 前にも言ったじゃん♡ お兄さんみたいな上物簡単に手放すわけないって♡」

「……うん♡ 絶対だからな♡」

「わかってるって♡ さて、と」

強烈な連続絶頂の余韻に浸りながら、兄が少女に頭を撫でられて気持ちよさそうに頬



を緩めていると少女は面を元に戻しカメラへと振り返った。

「そういうわけだから、お兄さんのことは心配しなくていいよー♥ もうすっかりメロメロだから、お兄さんの幸せのためを思うんなら放っておいてね〜♥」

そう言つて少女が手を振つたところで、映像が途切れた。

兄は最初に少女に促された時以外、何の興味もないかのようにカメラに一瞥もくれないことはなかった。